

---

# それでも君はここにいる

瀬能こゆき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

それでも君はここにいる

### 【Nコード】

N8875W

### 【作者名】

瀬能こゆき

### 【あらすじ】

里珠<sup>りず</sup>は一つ年上の幼馴染・大和<sup>やまと</sup>と付き合い始めて一年がたった。そんな時、大和が一人の友達を連れてくる。彼の名前は葵<sup>あおい</sup>。彼は静かに里珠を見つめる。初対面のはずなのに、その眼差しは懐かしく、そして切なかった。ファンタジー要素を含んだ恋愛ストーリーです（※この物語は他所でも同時に投稿しています）

## 忘れたくない

忘れたくない思い出がある。

わたしの隣には大好きなあの人がいた。

二人で奏でる初めての連弾。

曲目は「エンターティナー」

私は第一パートだったけど、その時のわたしにとっては難しかった。だけど、あの人はわたしよりも難しいはずの第二パートを易々と弾いて、子どもながらに自分が足を引っ張っていることが心苦しかった。

それでもあの人がわたしに文句を言うことはなかった。憶えてないだけだろうか。ううん、違う。本当にあの人は優しかったんだ。

完成した時は、二人で笑ってハイタッチした。

その時のあの人の輝くような笑顔。  
忘れたくない。

忘れたくない――なのに。

思い出そうとすると、水面に波紋が広がるようにその笑顔が揺らぐ。

なぜだろうとそれを不思議に思う気持ちも、ゆらゆらと揺れて不確かなものになる。

ゆらゆら揺れて遠くへ消える。

「忘れたくない」

そしてただ、その思いだけが残される。

# 1

「んじゃ、行ってくるね！」

居間に顔だけ覗かせて声をかけると、せんべいをかじりながらテレビを見ていたお母さんが、目を丸くして振り向いた。

「あら、もう行くの？ 三時からでしょ、早くない？」

確かに、今はまだ一時になったばかりだ。早いと言えば早いけど。

「んー。バイト行く前にちょっと大和<sup>やまと</sup>んちに寄ってくから」

隠すことなく言うと、お母さんも「あら、そう」と平然と答えた。わたしと大和の付き合いは、もうすっかり公認だ。

「ということで、行ってきます」

「あ、里珠<sup>りず</sup>、ちょっと待って！」

お母さんが慌てたように立ち上がった。

「大和くんち行くなら、昨日の煮物持ってってあげなさいよ。残り物で悪いけど」

そう言いながらバタバタと動き出している。わたしは大袈裟なため息をついた。

「いらないって。大和、今日外で食べるかもしれないでしょ。そしたら無駄になるじゃない」

「あんたが外食ばかりじゃ駄目よって大和くんに言っただけなさいよ。どうせ手料理作ってやるなんて気がきいたことやってないんでしよう。これ、冷蔵庫に入れば明日の朝までは持つだろうから――はい」

タッパーに移した里芋の煮物を手早く風呂敷に包み、お母さんはそれを差し出した。わたしは渋々それを受け取る。

「……まあ、大和はお母さんの料理が好きだから、そりゃあ喜ぶとは思うけど」

「でしょー。さ、ほら。いってらっしゃい！」

『お母さんの料理が好き』の言葉がよほど嬉しかったのか、お母さんは満面の笑顔でわたしの背を押した。我が母親ながら本当に単純だ。

十月に入って、ようやく「涼しい」という言葉がぴったりの気候になった。日差しもうららかで心地いい。わたしはのんびりと歩きながらその日差しを楽しむことにする。

大和の家はわたしの家からほんの二、三分しか離れていない。かなり近所だ。つまり、わたしと大和はいわゆる「幼なじみ」である。学年は大和の方が一つ上だけど、昔から何かとよく一緒に遊んだ。大和のお母さんがわたしのピアノの先生でもあったからだろうと思う。家に行くことが多かったから。

この辺りでも一際大きな二階建ての家の前でわたしは足を止めた。表札にはお洒落なローマ字で「YUZUKI」と書かれている。漢字で書くと「柚木」である。この大きな家が大和の家だ。この家に

今は大和一人で住んでいる。大和の両親は今イギリスにいる。一年ぐらい前に、海外赴任になった大和のお父さんに美和先生（わたしは未だに大和のお母さんをそう呼んでいる）も一緒について行った。当時大学に入っただけだった大和は日本に残ることになり、以来ここには大和一人だ。

立派な門構えにも臆することはなく、わたしはドアホンを押した。昨日この時間に行くように伝えておいたから、たぶん中にいるはずだ。だけど、しばらく待っても応答がない。

「あれ……？」

どこかに行ってしまったのだろうか。それとも寝てるとか。

もう一度ドアホンに手を伸ばした時、後ろから「里珠！」と呼び掛けられた。そこにいたのは、自転車に乗った、ショートカットの良く似合うスラリとした女の子。

「妃実ちゃん」

妃実ちゃん——君島妃実香きみじまひみかもこの近所に住む幼なじみだ。一見ボーイッシュだけど、とても美人。大和と同じで一つ年上だ。

「おひさー。何、今日はお家デートなんだ？」

からかう様な口調に、わたしはただ笑った。

「そういうわけじゃないよ。でも、出ないんだよね、大和」

「あらま。寝てんじゃないの？」

妃実ちゃんは自転車から降りてわたしの隣に來ると、遠慮なくド

アホンを連打する。わたしは呆れ半分で、自分より少し背の高い妃実ちゃんの横顔を見上げた。

「ちょっと妃実ちゃん。それやりすぎ」

「だって、出ないんでしょ」

妃実ちゃんはさらに連打。もう十回以上は押してそうだ。

「……出ないわね」

「うん」

ここまでやっても応えないところをみると、やっぱり留守なんだろう。ちゃんと言っておいたのに忘れたのだろうか。別に大した用事があったわけではないしそれはそれで構わないのだけど、問題はこれだ。

わたしはため息をつきながら風呂敷包みを持ち上げた。お母さんから持たされた煮物。門の前に置いて行くわけにもいかないし、持ち帰らないとだめだろう。ちょっとした手間だけど、それがかなり億劫だったりする。

妃実ちゃんが包みを見て首を傾げた。

「それ何？」

「うちのお母さんの手料理。大和に持って行って。でも持って帰らなきゃ」

「あー、それは面倒ね。大和、ちょっと買い出しに出てるだけかもよ。もうちょっと待ってみたら？　わたしも付き合っただけよ」

そう言って妃実ちゃんは門に寄りかかった。ガシャン、と派手な音は立てたが、立派な鉄の門は少しも揺るがない。



「妃実ちゃん、どっかに出掛ける途中だったんじゃないの？」

「うん、でも別に急ぎじゃないもん。ちょっと本屋にね。取り寄せた画集が入ったって連絡来たから」

「そうなんだ」

妃実ちゃんは美大の学生だ。言っている「画集」はその関係のところでだろうと想像しながら、わたしも妃実ちゃんと同じように門に寄りかかった。時計をみて時間を確認する。バイトまではまだ余裕があるし、わたしも時間の心配はなさそうだ。

「それにしても、あんたたちまだうまくいってるのね」

妃実ちゃんの言葉に、わたしは苦笑いした。妃実ちゃんの毒のある物言い、昔から変わらない。

「うまくいってるよ」

「ふうん。つまんないわね」

「え？」

さすがにぎよつとしてしまう。妃実ちゃんはくすくすと笑った。

「冗談よ。でも、大和と里珠が付き合うって言い出した時、正直、うまくいくのかなあって不安だったのよね、わたし」

それは初耳だ。不穏な言葉にわたしはただ妃実ちゃんを見返した。妃実ちゃんは少し目を伏せて独り言のように続ける。

「でも、もう一年も続いてるんだねー。心配するだけ無駄だったかな。取り越し苦労だった」

「妃実ちゃん？」

なんだか妃実ちゃんの言葉、すごく意味深に聞こえる。もう少し深く聞き返してみようかなとした時、妃実ちゃんが顔を上げてパツと目を見開いた。

「あ。大和、帰って来たよ」

わたしも妃実ちゃんと同じ方向に目を向けると、人が歩いてきているのが見えた。遠目からでも長身とわかる男性。そして少し長めの癖のある髪。確かに大和だ。でも、一人じゃない。同じ年頃の男性と一緒に。その男の人もまた大和と同じぐらい背が高い。

「友達かしらね。彼女が来るって言うのに友達連れてくるなんて、気の利かない男ね」

妃実ちゃんの毒舌にただ笑っていると、大和がわたしたちに気付いて手を振ってきた。そして隣の人と何か言葉をかわしている。おむね、わたしたちのことを説明してたりするのだろう。

「――あら？ あの人どこかで……」

二人の顔がはっきり見えるぐらい近付いてくると、妃実ちゃんは訝しげに眉を寄せた。どこかで会った人なのだろうか。

大和はわたしたちの前に来ると、精悍な顔を申し訳なさそうに歪めて片手を上げた。

「ごめん、里珠。ちょっと買い物に出た。――って、なんで妃実香もいるの？」

「いて悪かったわね。あんたの可愛い彼女が一人で待ちぼうけ食ってんのに付き合ってたのよ」

「ああ、そりゃどうもありがと」

妃実ちゃんの喧嘩腰をさらりと流すと、大和は穏やかな眼差しを再びわたしに向けた。

「だいぶん待った？」

「ううん。大丈夫。妃実ちゃんと喋ってたから」

「ほら、みなさい。感謝されてるじゃない」

「だからありがとうってば」

「ありがとうって態度じゃないくせに。それより、大和。彼は？」

妃実ちゃんが遠慮なく、少し離れたところに立っていた友達らしき人を示す。その彼は自分に注意を向けられ、少しひきつったように微笑んだ。改めて見ると、男の人にしておくには勿体ないぐらい綺麗な人だった。可愛らしい、という表現の方が近いかもしれない。男の人に対してすごく失礼だけど。

「あ、ああ、こいつね……」

大和がどこか困ったような笑みを浮かべ、その彼の肩を抱くようにしてわたしたちの前に押しやった。そしてたっぷりと間を取り、ゆっくりと彼を紹介した。

「こいつ——久遠葵<sup>くどあおい</sup>、だよ」

その直後、ばさりと音がした。妃実ちゃんが持っていた自分のトートバッグを落としたのだ。

「? どうしたの？」

妃実ちゃんは目を真円に近いくらい見開き、口許を両手で覆った。その手が――違う、体全体が小刻みに震え出す。見開かれた目が注ぐ視線の先には久遠さんがいた。

「妃実ちゃん？」

「うそ……」

うわ言のような呟きが妃実ちゃんの口から漏れた。

「葵のわけが――」

妃実ちゃんの体が膝から崩れ落ちる。

「妃実ちゃん！」

わたしは慌てて体を支えたけれど、重くて一緒に倒れそうになってしまう。それがふと軽くなり、気付くと大和が反対側から妃実ちゃんの体を支えてくれていた。とりあえず、ホッとしてわたしは息をつく。

それにしても、どうして妃実ちゃん――わたしは久遠さんに目を向けた。

久遠さんの真っ直ぐな視線とぶつかる。

わたしは思わず息をのんだ。

久遠さんはわたしを見ていた。

倒れそうな妃実ちゃんではなく、それを支える大和でもなく、ただ真っ直ぐに、わたしだけを静かに見つめていたのだ。

初対面だよ——妃実ちゃんはそう言った。

コンビニの前で偶然に会った友達だよ——大和はそう言った。

「久遠葵」というその人のことを。

当の久遠さんは、その綺麗な顔にただ薄く笑みを浮かべているだけだ。

——なんか釈然としない。

初対面の大和の友達を見て、妃実ちゃんは何をあんなに立てなくなるほど驚いていたのだろう。大和も大和で、そんな妃実ちゃんを見てもわたしみたいに慌てたりなんかしなかった。まるで妃実ちゃんの反応を最初から予想してたように。

絶対に変だ。全くもって釈然としない。

本当は妃実ちゃんは久遠さんのこと知ってるんじゃないんだろうか。だって、妃実ちゃんのはっきりと「葵」と久遠さんの名を呼んだ。そのことを、大和と久遠さんが離れた時に妃実ちゃんに指摘すると、妃実ちゃんは笑って「言ってないよ？」ととぼけた。じゃあわたしの聞き間違いか……違う、そんなことはない。

大和と目が合う。

いつも穏やかな彼の視線が、どこか不安げに揺れていたのをわたしは見逃さなかった。

大和はどうしてそういう顔をするんだろう。

大和と妃実ちゃんと久遠さん。

きつと三人の間には何かがあるのだ。たぶん、それをわたしだけが知らない。

なんだかモヤモヤとした気分になった。仲間はずれにされているような、そんな子供じみた嫉妬。

あの後、大和の家にみんなで入り、お茶なんて飲んでみたけれど全然会話は弾まなかった。大和と妃実ちゃんのどこか白々しい近況報告と、たまにそれにわたしも加わる程度の雑談。久遠さんにいったってはほとんど口を開かなかった。久遠さんの声聞いたのは「はじめまして」の挨拶ぐらいだったような気がする。

彼は一体どういう人なのだろう？

深く聞きたかったけど、その場では聞けなかった。聞いたところで大和も妃実ちゃんも「友達」「初対面」以上のことはきつと答えないだろうことはわかっていた。

それに、本当は聞くのが怖い気もした。

久遠さんはわたしをまっすぐに見る。その目がわたしは怖かった。知らない人なのにずっと前から知っているような、そんな気にさせられる視線。

懐かしい――なぜかそう感じた。そう感じると同時に胸のあたりが苦しくなった。それはこれまで味わったことのない胸の痛みだった。

『あなたは一体誰ですか？』

――聞きたいけど、聞けなかった。

\*

\*

\*

「今日はお客さん引けるのが早いみたいねー」

バイトの先輩、夕子さんがカウンターに頬杖をついてホールを覗きこんできた。ホール側でちょうどカップを補充し終えたわたしは、振り返って夕子さんに応える。

「今日日曜日だからでしょうね」

客席には四、五組のお客がいるだけだ。食後にゆっくりしている人たちがほとんどである。壁の時計は午後八時四十分を示している。いつもならもう少し賑わってもいるが、日曜日のこの時間はたいがいこんなものだ。週の初めくらいは早く帰宅して次の日に備えたいと思う人が多いのかもしれない。

ここはわたしがバイトしている喫茶店。個人で経営しているお店だけれど、それなりに広く繁盛している。喫茶店と言っても軽食もデザートもわりと充実しているし、なにより駅から徒歩五分圏内という好立地のおかげだろう。

わたしがここで接客のバイトを始めたのは今年の四月に大学に入ってからだ。店長は気のいいおじさんで、バイトの仲間もみんな良い人たちだ。とても居心地のいい場所である。家からも近いし、ここを見つけられて本当に運が良かったと思っている。

夕食時のピークを過ぎた今は、わたしと夕子さんの他に、もう一人高校生の平くんという男の子がいるだけだが、三人でも十分ゆつくりとやっていけるほど落ち着いている。バイト上がりまであと二十分。このまま穏やかに終わってくれればいいけど。

「いらっしやいませー」

平くんの声に夕子さんのお喋りを中断する。反射的に「いらっしやいませ」と声を上げたわたしは、店の入り口に立つ人を見て動きを止めた。

「え……」

目を疑ってしまった。そこにいたのは、昼間知り合ったばかりの「久遠葵」その人だった。

「雨宮さん？」

動かないわたしを不思議そうに覗きこみながら平くんがお冷をグラスに注いでいる。ハッと我に返った。

「ご、ごめん。わたしが行くから」

わたしは平くんの用意したお冷を半ば奪うようにして、それをトレイに乗せた。久遠さんは窓際の一番手前の席に座った。一つ深呼吸をして歩み寄る。

「——いらっしやいませ」

小さく声をかけてお冷を置くと、久遠さんが顔を上げ、にっこりと笑った。アイドル顔負けの笑顔だ。

「ごめん、突然」

「いえ、別に……でも、どうして？」

「大和にここでバイトしてるって聞いて。九時までなんだろう？ それまで待っててもいいかな。一緒に帰ろうよ」



「――へっ？」

思わず変な返しになってしまった。久遠さんはクスッと小さく笑い声を洩らす。

「大丈夫、大和は了解済みだよ。オレも大和んちに戻るから、ついで」

そうか、久遠さん大和の家に行くのか。そういうことなら断るのも逆に変なのかもしれない。わたしはコクリと頷いた。そのまま戻ろうとしたわたしの背中に「カフェオレ」と久遠さんの声がかかる。すっかり注文のこと忘れていた……。

「なんだ、里珠ちゃんの知り合いだったの？」

戻ったわたしに夕子さんが興味深々のキラキラした目を向ける。それでも注文を告げるときびきびと手を動かし始めた。

「もしかして新しい彼氏？」

「え、雨宮さん、カレシと別れたんですか？」

平くんまでひそひそと話に入ってくる。わたしは眉を顰めて同じようにひそひそと言葉を返した。

「別れてません。あのお客さんは彼の友達」

「なんだ、そうなんすか――あ。ありがとうございました」

客の一人が席を立ったのを見て、平くんはすぐにレジの方へ向かった。いつもながら機敏だ。

「里珠ちゃんの彼もカッコいいけど、あの人もすごくいいね。類は友を呼ぶっていうのかな」

夕子さんの言葉に苦笑い。たしかに二人とも美男子だとは思うけど。

「それはちょっと意味が違うと思う……」

「そっか——ハイ、カフェオレ」

夕子さんがカップをカウンターに置いた。それを受け取って久遠さんのもとへ運ぶ。

「お待たせいたしました」

「あ。ありがとう」

久遠さんは窓の外からわたしに視線を移し、目を細めて笑った。

あ、また——。

あの胸の痛みが甦る。わたしは慌てて目を逸らし、軽く頭を下げて席を離れた。

どうしてだろう「懐かしすぎて」胸が痛い。息が詰まるような感じがした。その理由がわからないことが、どうしようもなく不安だった。

——一緒に帰ることを承諾したの、ちょっと失敗したかもしれない。

\*

\*

\*

店からやや離れたところのガードレールの上に、久遠さんは足を

投げ出して腰かけていた。街灯の下のその姿はまるでスポットライトを浴びているようにキレイで、思わず見惚れてしまった。久遠さん、足長い。

ボーっとしていたわたしに気付いて久遠さんが立ち上がる。わたしは慌てて駆け寄った。

「ご、ごめんなさい、お待たせしました！」

「いや、大丈夫。そんなに待ってないから。さ、いこ」

久遠さんはゆっくりと歩き出した。わたしは一瞬迷ったものの、久遠さんの右隣に並んだ。後ろをついていくのも変だろう。

久遠さんはわたしより頭一つ分ぐらい背が高かった。大和よりも少しだけ高いかな……そんなことを思いながらちらりと横顔を窺った。顎の右側にわりと目立つほくろがあるのに気付きハッとする。

「あ……！」

何かがちらりと頭をよぎった。でも、道路を走る車が鳴らしたけたたましいクラクションのせいで、頭の中の何かは掴む間もなく散っていく。もう何も残っていない。

「君とゆっくり話がしたかったんだ」

前置きも何もなく、久遠さんがポツリと話し始めた。

「大和にそう言ったら、バイト先を教えにくれた。急に押しかけて悪いと思ってる」

「い、いえ……」

一体どう答えればいいのかわからない。

そもそも、わたしと話がしたかったということ自体が理解できなかった。それを大和が了承するとか……何それ。わたしの頭は混乱の一手手前だ。

「大和っていい男だよな」

これまた話が飛ぶ。全く話の方向性が見えないまま、わたしは曖昧に頷いた。

「ええ、まあ……？」

久遠さんはクスッ笑う。

「優しいし、家は金持ちだしな。里珠は幸せだな」

わたしは思わず足を止めた。止めずにはいられなかった。二、三歩先に進んで久遠さんが怪訝そうに振り返る。

「どうした？」

「今、久遠さん——」

『里珠』って。わたしのことを「里珠」と名前で呼んだ。当たり前のようにサラリと。

久遠さんはようやくそのことに思い当たったようで、「あー」と口許に手をやった。

「悪い！ 大和たちがそう呼んでたからつい。会ったばかりなのにいくらなんでも馴れ馴れしいよな。不愉快にさせたのならごめん」

「い、いえ……」

別に不愉快なんかではない。それどころかあまりにも違和感がなさすぎる。そんな自分の感覚がまた不思議でたまらない。なんだろう、これ。

「別に名前で呼んでもらっても構わないですけど」

戸惑いながらも、気が付けばそんなことを口走っていた。久遠さんの顔が嬉しそうに晴れる。子どものような無邪気な表情。

「そっか。よかった。それじゃさ、里珠もオレの事名前で呼んでくれよ。その方がしっくりくる。ほれ、呼んでみ？」

そう催促されて、わたしは勇気を出して久遠さんの名前を口にした。

「葵、さん？」

「さん、いない」

「え、でも……」

「いないって。オレたち、同じ年だぜ？」

これには少し驚いた。大和の友達というから、てっきり年上だと思っていた。でも同じ年なら……。

「じゃ、じゃあ遠慮なく——葵」

「——よし！」

何が「よし」なのかはわからないけれど、久遠さん——もとい、葵は満足したように再び歩き出した。その足取りがさっきまでよりも軽くなっているように見えるのはたぶん気のせいじゃないだろう。だって、わたしも同じだったから。

一度打ち解ければ、葵はとても話し易い人だった。何気ない話だが途切れることなく会話が続く。初めのうちに感じていた戸惑いも不思議な「懐かしさ」も、話しているうちにゆっくりと薄れていった。

大きな幹線道路を横切る横断歩道を信号待ちする。さっき赤に変わったばかりだからあと三分は待たないといけない。

遠くの方から救急車のサイレンの音が聞こえてきた。それは確実に近付いてきている。恐らくこの前を通るのだろう。思わず、ぎゅっと両腕を抱いた。

「どうした？」

葵の声かけに、慌てて笑顔を作って首を振った。

「何でもないよ」

「そう？」

どこか納得いかないように葵が首を傾げる。そのタイミングで救急車がわたしたちの前を通り過ぎた。固く目を閉じてしまったのはほとんど無意識だった。

「里珠。信号変わるよ」

葵の声に目を開けた。周りの人が歩き始める。信号が青に変わったのだ。救急車の音はとうに遠ざかってもうほとんど聞こえなくなっていた。

「ご、ごめん、行こっか――」

「もしかして、救急車が駄目とか？」

横断歩道に一步踏み出そうとしたわたしを、葵の言葉が止めた。葵を振り返ると、これ以上ないくらい真剣な目がそこにあった。

「里珠、救急車が苦手？」

ズバリと言い当てられ、わたしは力なく笑った。

「――うん」

横断歩道を渡るのは諦めた。観念して葵を見上げる。

「救急車がダメというか、サイレンの音が苦手。どうしてもだか気分悪くなってくるの」

「その原因は？」

「わかんない――あまり考えたことない」

本当にそうなのだ。苦手なものは苦手、ただそれだけのことだと思っていた。苦手になった原因など考えたことはない。

信号が再び変わり、車が動き出した。車の走行音で辺りがまた煩くなる。

「オレも、救急車は苦手だ。サイレンの音も」  
「え？」

思わず目を丸くすると葵が小さく息をついた。

「だけど、オレはちゃんと原因わかってるよ」

興味をそそられる言葉だ。つい身を乗り出してしまった。

「原因、何？」

「知りたい？」

「う、うん、知りたい」

「本当の本当に知りたい？」

「知りたい！」

もしかして、わたしのサイレン嫌いの原因も同じかもしれないし。そう思いながら期待を込めて葵の言葉を待つ。

ややあって、葵が口を開いた。

「——だめ。教えない」

意地悪そうに小さく舌を出して笑う葵。一気に気が抜けた。

「うわぁひどい。期待させといて！」

怒ったふりをして葵の手を軽く叩こうとした——その時。

「きゃッ！」

「うわ！」

『バチッ』という何かが弾けるような音と共に、手に鋭い痛みのようなものが走った。突然のことにわたしも葵もつい声を上げてしまった。

「な、何、静電気？」



そう、今は冬場によく起きる静電気だ。たまにドアノブなどを触れる時に起きたりするあの感覚によく似ていた。あれよりも少しだけショックを強く感じた感じだ。

「びっくりした……」

「ああ……」

葵もまだ呆けたように腕をさすっている。わたしが叩こうとした腕だ。その腕にわたしが触れた瞬間に静電気が起きたらしい。

「驚いたね……今日そんなに乾燥してんのかな」

「――だろうな」

二人で顔を見合わせて情けなく笑いあった。

この「静電気」が今後のわたしたちを苦しめることになるとは、この時のわたしには知る由もなかった。

大和の家の前で葵とは別れた。この時間に家を訪ねると言うことは、葵は今夜は大和の家に泊るのだろう。

「里珠は寄っていかないの？」と訊かれ、苦笑いしてしまった。付き合っているとはいえ、そんなにいつもベタベタしてる訳じゃない。わたしがそう言うのと、葵は少しだけ意外そうな顔をしていた。そんな顔をされる方がわたしとしては意外だ。こんな夜に男の人の家を訪ねるなんてことやってたら、親からはすぐに交際を反対されてしまう。いくら幼なじみの大和でも――いや、相手が大和だからこそ、変に家族とこじれることは避けたかった。

なんて、そんなこといちいち葵には説明しなかったし、葵も何も訊いてはこなかったけれど。

家に帰ると、お母さんとお父さんが居間でテレビを見ながらビールを飲みかわしていた。いつもの光景だ。うちの両親は子どもの目から見ても仲がよろしい。お母さんがにこやかにわたしを迎えた。

「おかえり、里珠。お疲れさまー」

「ただいまー。お父さん、おかえり」

「おう。ただいま。どうだ、お前も一杯？」

すでにちよっとほろ酔い加減のお父さん、未成年のわたしにも平気でビールを勧めてくる。それもわりといつものことだ。いつもならグラス一杯ぐらいはお付き合いするのだけど、今日はそんな気分じゃない。丁重にお断りすることにしよう。

「ごめん。疲れたからやめとく。風呂入って寝るねー」

「おお、そうか。じゃあ、ゆっくり休め」  
「ありがと」

わたしはそのまま居間を出しようとして、ふと思いついて足を止めた。

「あ、そうだ」

二人が同時に振り返る。

「なんだ？」

「どうしたの？」

「あのさ、わたしの救急車嫌いって何か理由があったわけ？」

軽く……本当に軽く訊いてみたつもりだったのだけど。

ふたりの笑顔がピタリと貼りついたように動かなくなった。その反応に首を傾げた時、こめかみに、ズキッと軽い痛みが走った。

『これ以上は訊くのを止めた方がいい――』  
何かがそう訴えかける。

「――やっぱり、なんでもない」

そう言ったのはほとんど反射的なものだった。両親がようやくハッとしたように表情を動かした。

「里珠、どうしたの、突然？」

お母さんは穏やかな笑顔を作り平静を装ってはいるけれど、その内心の動揺がなぜか今のわたしには手に取るようにわかってしまった。

お母さん——怯えている？

ちらりとお父さんを見ると、さっきまでのご機嫌そうな笑顔はすっかり消え、むっつりとした顔でビールを口に運んでいる。

急激に動悸が激しくなった。嫌な感じがする。

わたしはもう一度お母さんに目を戻して、笑って首を振った。

「ううん、なんでもないよ。ごめんね」

「あ、里珠!？」

お母さんの呼びとめる声にも応えずそのままバタバタと居間を出た。部屋への階段を駆けあがりながら、胸をぐっと押さえた。

嫌だ、嫌な感じだ。

お母さんの怯えたような反応も、お父さんの不機嫌も、わたしの些細な質問のせいだ。

『救急車嫌いって理由があったっけ?』

ただそれだけの質問。

だけど、両親にとっては「些細な」質問ではなかったのかもしれない。

何故? どうして? 頭を回る疑問、そして混乱。

自室に入りドアを閉めて、すぐに何度か深呼吸をした。それでもなかなか動悸は治まらなかった。

葵にも話した通り、わたしは自分の救急車嫌いの理由をこれまで深く考えたことはなかった。当然、両親にも訊いてみたことはない。だけど、今思えばそれさえも不思議に思えてきた。何故考えなかつ

たのだろう？ 何故訊かなかったのだろう？

もしかして、考えなかったのではなく、考えられなかったのかもしれない。訊かなかったのではなく、訊けなかったのかもしれない。

『オレも救急車は苦手だ……——ちゃんと原因はわかっているよ』

唐突に葵の言葉を思い出した。そのとたん、こめかみが鋭く痛み出した。さっきも感じた痛みだ。でも今度はさっきよりも激しく、長く続く。

「っ……」

わたしは頭を抱えるようにしてしゃがみこんだ。  
痛い。頭が割れるように痛い……！

「な、に、これ」

得体のしれない頭痛に恐怖すら覚える。その時、肩から提げたまのバックが振動を伝えてきた。携帯電話だ。

「う……」

わたしは痛みに耐えながらバッグの中からそれを取り出した。

大和からの着信——そう確認したとたん、それまでの頭痛が嘘のようにスーッと和らいでいった。意識が痛みよりも携帯電話に向いたせいなのかもしれない。よくわからないけれど、とりあえず頭痛が治まりつつあることにホッとした。

「——もし、もし……」

『もしもし、里珠？』

わたしの名を呼ぶ大和の穏やかな低温が耳に心地いい。思わずため息が漏れた。そしてそれはきっちり向こう側にも伝わってしまったようだ。

『どうした？ 何かあったのか？』

心配そうな口調に変わる大和。わたしは小さく首を振った。大和から見えるはずはないのだけど、つい。

「ううん、なんでもない。頭が少し痛くて」

話しながらベッドに移動して、そのままゴロンと仰向けになった。それだけでも体が楽になる。

『頭痛って、大丈夫なのか？』

「うん。平気。大和の声聞いたら治まった。薬より効くかも」

『そりゃ……お役に立てて何より』

どこか間の抜けた返事がおかしくて、つい声を立てて笑ってしまった。どうやら大和も笑っているようだ。こんなちょっとしたことが幸せだったりする。

『でも本当に大丈夫なのか？』

それでも心配そうに尋ねてくる大和に、わたしははっきり「うん」と答えた。嘘じゃなく頭痛はすっかり消えてしまった。

「もう大丈夫。ところで、何か用だった？」

こんな時間に彼から電話があるのは実は珍しい。付き合っているにしては少し変かもしれないけれど、大和とはあまり電話で話すことはないのだ。家が近いせいかもしれないし、お互い電話で話すのがあまり得意じゃないせいもある。

『いや、別に用じゃないけど……』

大和は一度言い淀むように言葉を切ったけれど、すぐに続けた。

『さっき、葵と一緒に帰って来ただろ？ どうだった？』

「え？」

急なその言葉に、一瞬目が点になってしまった。「どうだった？」の質問の意図が掴めない。

「どうって……どういう意味？」

『――』

戸惑いを隠せないわたしに返ってきたのは、どこか重い沈黙。たつぷり五秒……十秒。さすがに不安になった。

「や、大和？」

『いや……ごめん。なんでもない』

大和の声は小さかったが、とりあえず返事があったことに安堵する。それでもなんとなく気まずい気がして、わたしはあえて明るい声を出した。

「別に謝って貰わなくてもいいけど。何？ 葵がどうかしたの？」  
『……葵、か』

ポツリと返された呟きが、わたしが「葵」と呼び捨てたことに対してのものだと気付き、慌てた。

「あ、あの、葵が――あの人がそう呼んでいいって言うから、つい。同じ年だって言ってたし……た、他意はないよ？」

『わかってる。別に、いいよ』

小さく笑う気配がした。その柔らかな気配はいつもの大和のもの。わたしはホッと息をついた。それにしても……。

「ねえ、どうしたの、大和？ 変じゃ――」

『なあ、里珠』

わたしの言葉を大和はやんわりと遮った。

「な、何？」

『……好きだよ』

一瞬、心臓が止まるかと思った。それぐらい驚いてしまった。耳に当たった携帯電話から聞こえたそれは、まるで耳元でささやかれたかのように聞こえたから。

一拍置いて、ようやく胸がドキドキと騒ぎ出した。体中の血が顔に集まって来ているような気がする。

「な、なに、急に……！」

『なんだろうな、急に言いたくなった。好きだよ、里珠』

照れた様子もない真っ直ぐな大和の言葉。あまりにも心に沁みて、もう何も言えなくなってしまった。クスクスと大和が笑う。



『やっぱり、顔見て言いたいな。なあ、里珠、今からウチに来る？』  
「——ええっ？」

驚き過ぎて思わずガバツと身を起こしてしまった。その様子が見えている訳もないのに、タイミング良く大和が笑い声を上げた。

『声でかいよ、里珠。冗談だよ、冗談。とりあえず、ウチには今葬  
いるから、来てもらっても逆に困るし』

まだ大和の声には笑いが含まれている。わたしはドキドキしっぱなしの心臓を落ち着かせるように、大仰なため息をついた。

「ま、まったくもう、人をからかって」

『別にからかってはいないけどね。今度はちゃんと顔見て言う。ということで、また明日な。夜更かしなんかしないで早く寝ろよ』

「やだな、大和。お父さんみたい。——わかってるよ。また明日ね」

バイバイ、と言って電話を切った。自分の声が聞こえなくなった部屋は、当たり前前だけどしんと静まり返っていた。

一つ大きく息をつき、再びベッドに横になる。

……やっぱり大和、ちよつと変だった。

好きだ、とか言われたことじゃない。大和はこれまでも時々そういうことを口にする。わたしはその度にドキドキさせられて、未だに慣れないでいるのだけど。

だけど、変だと思った原因はそれじゃない。

「大和、葬を気にしてた……？」

わたしが二人で一緒に帰ったから？　だけどそれは大和も了承済みのことだったはず。だったらなぜわざわざ電話かけてきたのだろう——まるで、葵とのこと探るみたいだった。

そこまで考えて、わたしはブンブンと頭を振った。大和が葵とわたしのことを探る？　そんなこと必要ない。意味がない。でも、だけれど……。

「……あーもうっ！」

わたしはゴロゴロとベッドの上を転がった。なんだかモヤモヤとして気分がまったくスッキリしない。

今日はずっとこんな感じだ。ずっと何かを考え続けている。そして、その全てが「久遠葵」という人に関係することだ。

初対面の時の、妃実ちゃんの反応。

突然バイト先にやってきた葵。

救急車のこと。両親の反応。

そして、大和からの電話。

脳裏に、葵の綺麗な顔が浮かんだ。「里珠」とわたしを呼ぶ声が甦った。懐かしさ感じる眼差しを思い出した。

「ああ、また……」

胸が痛い——セツナイ。

その感情を持て余し、わたしはギュッと固く目を閉じた。

葵。あなたは一体誰ですか。  
ただその答えが知りたかった。



\*

\*

\*

ピアノ、好き？

ううん好きじゃない。だって、全然うまく弾けないし、練習も好きじゃないし。

じゃあ、辞めるの？

辞め、ない。

どうして？

だって……。

『だって』

どこか遠くに感じていた会話がだんだんと近くなって、いつの間にか自分の声と重なっていた。ふと気付けば、わたしの隣には不思議そうな顔で首を傾げるあの人がいた。よく知った、大好きな人。その人がじっとわたしの答えを待っている。

わたしは俯いて声を振り絞る。

『だって、もうちょっと上手になったら、一緒に弾ける、かもしれない、し』

少しだけ間をおいて、彼が言った。

『じゃあ、頼んでみようよ。今度の発表会、二人で連弾させて下さって』

驚いて顔を上げた。彼はただニコニコと笑っている。大好きなそ

の笑顔にもう何も言えなくなった。

嬉しさと恥ずかしさと、何かわからないポカポカとしたものが胸に込み上げて来て。

ああ、なんて幸せなんだろう。

そんなことを思ったりした。

——そんな懐かしい夢を見た。

懐かしすぎて、目が覚めてからもしばらくその余韻に浸っていたわたしは、ゆっくりと瞬きをしてようやく体を起こした。

それでも、まだ夢の「残り香」が体の周りに纏わりついているような感じだ。けっして悪い気はしない。だけど、懐かしすぎて「悲しい」——そんな気がした。

「……まあいっか」

気持ちを紛らすように、大きく欠伸交じりの伸びをした。朝から物思いにふけている時間はない。

「よいしょ！」

わたしは威勢よく声をあげて、ベッドから下りた。

\*

\*

\*

駆け寄るわたしに気付き、大和が片手を上げる。文句のつけようのない爽やかな笑顔だ。

「おはよう」

「おはよう！ 大和」

わたしたちは、お互いの講義の時間が合う日はたいてい一緒に行くことにしている。とくに約束はしていないけれどいつの間にかそれが当たり前のような感じになっていた。

大和の家から駅までの十五分、通り慣れた道を二人で肩を並べて歩く。この時間がわたしは大好きだった。

「あ、そうだ。昨日あ——」

葵、と名前を出そうとして、思いとどまった。昨日の電話を思い出し、迂闊に口にはいけない気がしたのだ。大和はそんなわたしに少しだけ苦笑する。

「葵？」

優しく首を傾げて問いかけてくる大和に、わたしはためらいつつ頷いた。大和は特に気にするふうでもなく、いつもの笑顔を浮かべている。

「葵ね、しばらくウチに泊ることになったから」

「えっ！」

「いろいろ事情があるみたいで。だから、里珠ともこの先顔合わせることあるかもしれないけど」

大和が改めてわたしに目を向けた。

「その時は仲良くしてやって」  
「え……うん」

自分の彼氏に他の男の人と「仲良くして」と言われるのもなんだか微妙な感じだ。もちろん、大和は変な意味で言ったわけではないのだろうけど。

「じゃあ、あの人まだ大和の家にいるの？」

「いや。今朝はもうどこかに出かけたみたいだな——なに、あいつのこと気になる？」

冗談っぽく顔を覗きこんでくる大和に、わたしは慌てて首を振った。

「べ、別にそういうわけじゃ」

焦るわたしの言葉を遮るように、ポン、と頭の上に手が置かれた。

「ごめん、じょーだん」

「——！」

大和がわたしの頭を抱きかかえるように自らの体に寄せる。ふわりと大和の匂いに包まれ、一瞬で頭に血が上ってしまった。

「ちょ、やめ……朝からっ！ か、髪が乱れるから——！」

「なに、じゃあ夜だったら乱してもいいの？」

クスクスと笑う大和。ますます慌ててしまった。

「や、大和っ！」

「ハイハイ、照れ屋だなあ」

おまけのように頭を一度軽く叩いて、大和はわたしから手を離した。わたしは髪を整えるふりをして必死に動揺を抑える。

心臓がバクバクしていた。

「里珠、行くよ？」

わたしの動揺なんて気にするでもなく、大和がのんびりと振り返る。大和にとって、あの程度のスキンシップはきつとどうってことないのだろう。こういう時、一年の年の差——経験の差を感じる。大和がとても大人びて見えてしまう。わたしが子どもなだけかもしれないけれど。

気を取り直して大和の隣に並ぶと、大和はにっこりと笑った。

大和はとても整った顔立ちをしている。切れ長の奥二重の目が笑うと三日月形に垂れて、精悍な顔が一気に優しくになる。その優しい笑顔にわたしはいつも見惚れてしまう。

不思議だ。大和とは物心ついた時から一緒にいるのに、未だにその人の姿を見てドキドキしているのだから。それはやっぱり、大和がわたしの初恋の人だからだろうか。そう、初恋の——。

「あ！」

つい声を上げてしまった。大和が驚いたように顔を向けた。

「何、突然？」

「ごめん、急に思い出して。今日ね、夢見たんだ」

「夢？」



大和が首を傾げる。わたしは勢い込んで続けた。

「そう。子どもの頃の大和とわたしの夢。連弾しようねーっていう頃の」

「あー」

大和は戸惑ったように笑いながら空を仰いだ。子どもの頃の話をする、大和は時々こんな風に戸惑ったような困ったような表情をする。照れ臭いのだろうか。

「なんかすっごい懐かしかったなー。あの頃からわたし、大和のことが――」

好きだったんだよ、と続けようとしたけど続かなかった。照れたからとかそういうことではなく、驚いて言葉が出なかったのだ。何気なく向けた視線の先に、あの人がいたから。

つい足を止めてしまったわたしに、大和も不思議そうにその方向に目を向ける。

「――葵」

大和がポツリとその人の名を呟いた。

右側前方にある小さな通りの横断歩道の前にその人は立っていた。斜め後ろからしか見えないが確かに葵だ。何をするでもなくただ立っている。信号待ちをしているのではない。その信号は既に青だ。ポツリと立っているのは葵だけ。通りすぎる人が訝しげに彼を振り返っていく。

「な……何やってるの？」

「さあ」

大和は葵のいる横断歩道とは反対の方にサッと向きを変えた。駅に行くには確かにそちらに曲がるのだけど、その素っ気ない態度が気になった。

「ね、ねえ、大和。声かけないの？」

「いいよ、子どもじゃあるまいし。ほっとけよ」

「で、でも」

「里珠、いいから」

柔らかに、それでも反論を許さない調子で大和が言う。スタスタと先を歩く大和にもう何も言えなくなった。

確かに葵は子どもじゃない。いちいち声かける必要はないのかもしれない。だけど気になる。葵のことも、葵を気に留めようというしない大和のことも。

大和はわたしに歩調を合わせてはいるけど、一度も振り返ろうとしない。それが逆に気になった。

チラリと後ろを振り返ってみた。

葵は同じ場所にただじっと立ち尽くしている。

その目は前を流れる車の列を見つめているのか、それとも別の何かを見ているのかわたしにはわからない。

もしかしたら、大和はわかつているのかもしれない——どこか頑なな大和の横顔を見ながら、なぜかそんな気がした。

＊

＊

＊

バイトが終わり、店を出てから携帯を確かめると、大和からのメ

ールが入っていた。

昨日の煮物のお礼と、タッパーを返しにわたしの家まで一緒に行くからバイトの帰りに家に寄って、という内容だった。

歩きながら承諾の旨の返事を簡単に送ると、すぐに「待ってる」と返ってくる。大和は今日はバイトなどもない日だから家にいるのだろう。

大和は、我が家から食べ物などを貰うと、後日必ず直接お母さんにお礼を言いに来る。わたしに言付けるだけでも構わないのにそういう礼儀は忘れない。大和にしてみればそれは当然のことのようで、特にうちの親に気に入られたいとかそういうつもりでもなさそうだ。まあ、子どもの頃から知ってるし、今さら気に入られるものもないのだろうけど。

そんなことをぼんやり考えながら歩いているうちに、ふと昨日の帰り道のことを思い出した。

昨日はこの道を葵と一緒に歩いたのだ。

葵――彼は不思議な人だ。

葵には初対面の人特有の緊張感をなぜか感じなかった。わたしにしてみれば、会ったその日に名前を呼び捨てにするなんて普通では考えられないことだ。今思えば抵抗感がなかったのが不思議でならない。

葵のことは何も知らない。昨日の会話はほとんど世間話のようなもので、個人的なことは全く話さなかった。もっといろいろ聞けばよかったかな、と今になって思う。

こんなふうに考え込むぐらいなら、本人にいろいろ聞いてスッキリした方が良かったような気がする。大学はどこなのかとか大和とはどんな友達なのかとか、本当は妃実ちゃんとも知り合いなんじゃないかとか。

聞きたいことはもつとある。

どうしてわたしはあなたを見て懐かしい気持ちになるんですか？

あなたを見ると胸が痛くなるのはなぜですか？

「あなたは誰ですか」——そう聞いたら彼はどう答えるだろう。

そう考えて、わたしは一人失笑した。「あなたは誰ですか」なんてずいぶん曖昧な質問だ。それを葵に聞きたいと思っている自分がおかしかった。

「あ……」

小さな通りの横断歩道を渡ろうとしてわたしは思わず足を止めた。

この横断歩道、今朝葵を見かけた横断歩道だ。

葵はここで一体何をしていたのだろう。

首を傾げつつ、わたしにとっては何も変わったところのないその横断歩道を渡る。渡ってしまったてからもう一度振り返ってみただけど、やっぱり特に何があるわけでもなかった。

今度会ったら聞いてみようかな——そう思いながら歩を進める。その時に道の横にある児童公園に目をやったのは無意識だったのだけど。

「——え？」

わたしはつい目を疑った。公園入口付近の銀杏の木の下に、まさに今しがた考えていたその人がいたのだ。

「葵？」

わたしは思わずそこへ駆け寄った。葵はとうにわたしのことには気付いていたようで特に驚いた様子は見せなかった。

「おかえり。バイト帰り？」

「うん。葵は何やってるの？」

こんな小さな児童公園、夜に来るような所ではない。こんな人気がない場所で木に寄りかかって一体何をしているのだろう。

「見てたんだ」

葵はそう言って視線をどこかへ動かした。

「見てた？」

わたしは葵の視線を辿る。辿って、思わず息を飲んだ。葵が見ていたのは、さっきわたしが渡ってきた横断歩道だった。

「見てたって、あの横断歩道？」

「そう」

視線を動かさず答えた葵の顔は、どこか悲しげに見えた。その表情に一瞬ためらいを覚えたが、わたしは思い切って口にした。

「葵、今朝もあそこ見てたよね？ あの横断歩道がどうかしたの？」

葵がゆっくりとわたしを見た。

「あそこは、大事なものを失くした場所だ」  
「大事なもの？」

葵は目を閉じ小さく微笑んだ。

「そう。とても大事なものを」

わたしは言葉を失ってしまった。葵の顔が、微笑んでいるのにまるで泣きそうに見えたから。

その痛々しい表情が胸に突き刺さった。何か言葉をかけたいのだけど、何を言っているのかわからない。

葵が目を開けた。もう泣きそうな顔はしていない。だけど、そこから伝わってくる痛々しさは変わっていなかった。

「――里珠は憶えていないんだな」

微笑みを消し、葵が言った。その言葉に心臓がドクンと激しくなった。意味がわからず戸惑う。

「え……？ なに、葵」

問い返したわたしに、葵は一度目よりもやや強い口調で答えた。

「里珠は本当に何も憶えていないのか？」

「憶えていない……わたしが？」

言葉を繰り返すと動悸が一段と速まった。同時に、チリリとこめかみが痛み出した。

葵が被せるように言葉を放つ。

「本当に全部忘れてしまったんだな。あの時のことも、オレのこと  
も」

「え……忘れ……？」

全部？ あの時？ オレの——葵のこと？ 何？  
わたしはすっかり混乱していた。わけがわからなかった。

それよりも、頭が——頭がひどく痛い。

締め付けられるように痛むこめかみを、わたしはギュツと手で押さえた。

痛い——苦しい。

頭の痛みと同時に動悸がこれ以上ないほど激しくなった。全速力で走ったみたいに苦しくて、息遣いが荒くなる。立っていられなくなりそうだった。

「葵……」

助けを求めるように葵を見た。葵は自分も苦しそうな顔をしてわたしを見ていた。だけど、手を差し伸べてはくれない。

痛くて苦しくて、何が何だかわからなくなった。  
もう何も考えられない——。

「里珠！」

突然介入してきた声に、わたしは辛うじて意識を保った。

「なにやってる！」

聞きなれた声——大和？

「里珠、大丈夫か？」

大和はすぐにわたしの腕を掴むように体を支えてくれた。走ってきたのか、ちょっとだけ息が上がっている。

ああ、大和が来てくれた……それだけで気持ちがスツと楽になった気がした。それでも頭痛は和らぐことはなく、息苦しさも変わらなかった。大和の顔を見上げることすらできない。

「里珠……葵」

大和の声が低くなった。

「里珠に何を言った？」

少しの間をおいて、淡々とした葵の声がした。

「……本当にオレを忘れたのか、と」

次の瞬間、バチンと渴いた音がした。

大和が叩いたのかな……なんとなくぼんやりとそう思った。なんだか現実感がない。

頭痛も息苦しさも感じなくなってきて、かわりに、どこかふわりとした浮遊感みたいなものを感じた。

「里珠には——まだ——あれほど——」

葵に向って話している大和の声がだんだん遠くなっていく。

こんなに怒ったような大和の声、これまで聞いたことないな……そう思いながら、わたしは目を閉じた。

「里珠!？」



大丈夫——そう答えたけれど、それはもう言葉にはならなかったかもしれない。

目が覚めた時、まず一番に目に入っただのは大和の心配そうな顔。そしてその横にはなぜか妃実ちゃんがいた。

「里珠。気が付いたか？」

大和がホッとしたように小さな声でそう言って、わたしの頬にそっと手を触れた。少しだけひんやりとしたその感触に、体中の感覚が戻っていく気がする。何度か瞬きをしながら周囲を見回して、そこが大和の家のリビングだと気付いた。わたしが寝ているのは部屋に置いてあるソファアールだ。

なぜ、ここにいるのだろうか……まったく状況がわからない。

その戸惑いが顔に出ていたのだろうか、大和が答えをくれた。

「俺がここに運んだんだよ」

その言葉に目を丸くすると、大和は気遣うように微笑んだ。

「里珠、外で気を失ったんだ。妃実香には手伝いに来てもらった」

「さっき大和から連絡を受けてね。いきなり里珠の家に連絡したら、お婆さんたちを心配させちゃうだろうから」

妃実ちゃんがわたしの顔を覗き込むようにして笑った。

「里珠んちには私が電話しておいたから心配しないで。久し振りに三人で昔話に花が咲いて、って言ったら、お婆さん笑ってたわ」

口調は軽いけれど、その顔にはやっぱりわたしを氣遣う色が浮かんでいる。

大和も妃実ちゃんも心からわたしを心配してくれているのがわかる。

それも当たり前かもしれない。外でいきなり氣を失ったっていうんだから。

「面倒かけてごめん……でも、なんでわたし……」

自分の身に一体何が起きたのか——混乱しながらもその時の事を思い出そうとした。その途端、頭がズキン、と痛んだ。一瞬顔が苦痛に歪む。大和がわたしの額に手を乗せた。

「無理するな」

労わるような声に思わずそのまま目を閉じてしまいそうになる。だけど、わたしは小さく首を振ってやんわりと大和の手を外した。

「大丈夫……起きるね」

頭の痛みよりも、今の自分の状況がわからない方が嫌だった。このまま黙って横になっている気分ではない。妃実ちゃんがわたしが体を起こすのを手伝ってくれた。

「ありがとう」

「大丈夫？ どっか痛いところない？」

まるで子どもに向って話すような口調の妃実ちゃんに、つい笑みがこぼれてしまった。

「やだ。妃実ちゃんが優しい」

「ちよつとあんたね。ずいぶん失礼じゃないの」

そう笑って言う口調もやっぱりいつもよりも柔らかだ。

「だって本当のことだもん」

声を出して笑うと、少しだけ気分も落ち着いて来た。わたしは改めて大和と妃実ちゃんを見返した。

「ふたりとも心配かけてごめん。だけど、わたし一体どうしたのかな……よく思い出せないんだけど」

大和と妃実ちゃんが顔を見合わせる。無言だったけど、何かの確認をするかのように頷き合うと、突然大和が部屋の外に向って声をかけた。

「葵。入れよ」

その名前についビクリとしてしまった。他に人がいることを考えていなかった。そういえば、葵は大和の家に泊っていると言っていたっけ。

居間の入り口から葵が姿を見せた。葵はゆっくりとわたしたちの方へ近付いたが、ある程度の距離を置いたところで止まった。

「……体、大丈夫か？」

そう言ってわたしに目を向けた葵は、自分の方が傷付いたような表情をしていた。顔色も悪い。

「うん、平気……葵は？」

ついそう聞き返してしまった。葵は驚いたように眉を上げたが、すぐに小さく首を振った。

「オレは全然……ごめんな」

葵が突然頭を下げた。わたしは驚いてどう反応すればいいのかわからず、思わず隣に座っている大和に目を向けてしまった。大和がわたしを探るように見返した。

「里珠は葵と話をしている時に気を失ったんだよ。憶えてない？」  
「え？」

葵を見やると、わたしの答えを待つかのように、じっとこちらを見つめていた。

「あ……」

その目を見ているうちに、少しずつその時の事が甦ってきた。

ああ、そうだった。わたしは葵と話をしていたのだ。

夜の公園。

木に寄りかかって立っていた葵に、バイト帰りだったわたしが話しかけた。

葵は何かを見ていた。何か——横断歩道だ。

葵は、あの横断歩道を「大事なものを失くした場所だ」と言って、そして……そして？

「痛……！」

またあの頭の痛みが襲ってきた。頭を抱えたわたしの肩を、大和がぎゅっと抱き寄せてくれる。

「大丈夫か？ 無理なら思い出さなくてもいい」  
「思い……出す……？」

何かが琴線に触れた。  
頭の中に声が響いて来た。

『本当にオレのことを忘れたのか』

これは誰の声？ 葵？

答えるかのように、葵の目がわたしを真っ直ぐに見つめている。  
苦しそうな顔をして。

『里珠は本当に何も憶えていないのか？』

そう問いかけてきた葵の声をはっきりと思い出した。その時の葵も、今と同じように苦しそうな顔をしていた。

「わたしが……葵のことを忘れたの？」

わたしの言葉に、大和の体がピクリと動き、肩を抱いてくれている手の力が少しだけ強くなった。そして、反対側の隣に座った妃実ちゃんが、膝の上に置いたわたしの手をそっと握り締めた。

頭が脈動に合わせてギリギリと痛んだけど、大和と妃実ちゃんの

ぬくもりがそれを和らげてくれている気がした。

葵と話をしている時は、この痛みにかけてわたしは意識を手放してしまったのだと、今になって理解した。

この頭痛は、葵の言葉によってもたらされたもの。

だけど、知りたい。

今は痛みよりも、何かに急きたてられるようなその感覚の方が強かった。

葵の言葉の意味をちゃんと知りたい。

「わたしは何を忘れたの？」

葵の目が揺らいだ。その目が大和に向けられる。

大和がそれに応えてゆっくりと頷いた。そして、わたしから身体を離すと両肩を掴んで真剣な顔で目を覗き込んできた。

「里珠——話すよ。でも、これは里珠にとってかなりショックなものだと思う。また気を失うほどのことが里珠を襲うかもしれない。その覚悟はあるか？」

あえて淡々と話したであろう大和の言葉に、つい怯んでしまった。気を失うほどショックな話……。

あの痛みと苦しみは思い出すだけでもゾッとする。それがまた襲ってくるかもしれない。逃げたいと思ってしまう。

それでも、それ以上に……。

「わたしは知りたいの」

わたしはきっぱりと答えた。大和はそれをじっと見つめゆっくりと頷いた。妃実ちゃんが握っていたわたしの手をポンポンと叩いた。

「大丈夫よ、里珠。私たちがちゃんと付いてるから」

妃実ちゃんのその笑顔に「やっぱり」と思った。やっぱり妃実ちゃんも知っていたのだ。

葵と一番最初に会った時、妃実ちゃんの様子がおかしいと思ったのは正解で、妃実ちゃんも本当は葵のことを知っていたのだ。

そして、たぶん。

わたしも本当は葵のことを知っていたはずなのだ。

わたしたちはみんな知り合いなのに、わたしだけが葵のことを忘れてしまっていた。その理由を大和も妃実ちゃんも知っていて、わたしをこんなに氣遣ってくれているのだと悟った。

わたしは葵を真っ直ぐに見つめた。葵もわたしを見つめていた。初めから、その眼差しを「懐かしい」と感じていた。わたしは心のどこかでは葵のことを知っていたのだ。

なのにどうして記憶の中に葵のことがないのだろう。

「葵、あなたは誰？」

ずっと聞きたかったその言葉が口をついて出た。

葵は目を伏せ一度大きく深呼吸をすると、何かを決意した顔を上げた。

「オレは、大和や妃実香と同じで、里珠の幼なじみだよ」

葵のかすれた声に、なぜかわたしの目から一粒だけ涙が零れた。



\*

\*

\*

それは十年前のある夏の日の事。

ある横断歩道で交通事故が起きた。

横断中の男の子と女の子が、信号無視のワゴン車にはねられた。二人とも、何カ月にもわたり生死を彷徨う重体だった。

事故の数カ月後、男の子は家族と共にこの地を去って、女の子はもとの居場所で日常を取り戻した。

ひどい事故だったにも関わらず、女の子の体には少しも障害は残らずなんの後遺症もなかった――そのはずだった。

だけど、女の子はこの事故の記憶を全て失っていた。

共に事故に遭った男の子のことも、全て。

周囲の大人は、時間が経てば思い出すだろうと、無理に記憶を戻すことを控えた。

男の子の話をすると、女の子は酷い頭痛を訴え、時には気を失うことさえあった。

救急車のサイレンの音を聞くだけで、女の子の顔は青ざめ、体を震わせた。

あの事故は、女の子の体には障害を残さなかったが、心には大きな傷を残していたのだ。

だから、女の子の前で交通事故の話をする者は誰もいなかった。まるで、そういった出来事など最初からなかったかのようにして過ごした。

そうして月日は緩やかに過ぎて行った。

大和が話してくれたのは、こんな話だった。

——そう。

この女の子はわたし。

そして、わたしと一緒に事故に遭った男の子が、葵。

＊

＊

＊

「里珠、もう寝た？」

小さな妃実ちゃんの声に、わたしは軽く閉じていた目を開けた。

「ううん。起きてる」

横を見ると、妃実ちゃんと目が合った。部屋の電気は消えているけど、レースのカーテン越しに月灯りが差し込んで、ものを見るには困らない暗さだった。今日は満月だ。

わたしと妃実ちゃんは、大和の家の一室に布団を並べて横になっていた。

すっかり動揺しきっていたわたしを気遣い、大和が妃実ちゃんと一緒に部屋を用意してくれたのだ。

「眠れない？」

妃実ちゃんの問いかけに正直に頷くと、妃実ちゃんは吐息をつい

て微笑んだ。

「そうよね。急にあんなこと聞いたら眠れないよね」

「ん……」

わたしは小さく笑って視線を天井に向けた。

わたしは、全てを聞いた。

それはにわかには信じられない話で、混乱を極めたわたしは、ただ黙りこんで馬鹿みたいに涙を流していた。

頭の中で鐘を鳴らされているかのような頭痛がわたしを襲った。

暑くもないのに汗が噴き出た。体は震え息は苦しくて、吐き気も込み上げてきた。

だけど、気を失わなかったのは、妃実ちゃんがずっと手を握ってくれていたからだ。

そして、大和がしっかりと肩を抱いてくれたからだ。

それがなければ、わたしはさっさと意識を手放して、早く体が楽になる方を選んだと思う。

——わたしは記憶を失っていた。

事故の記憶も、葵の記憶もわたしの中にはない。ないのではなく、奥底に沈んでしまったのか。

話を聞いた今も思い出すことはできない。思い出すのを拒否するかのように頭が痛んで、それ以上はどうしても記憶を引き出せなかった。

話をしている間、葵はずっとわたしを見ていた。

泣いているわたしを見て、自分も泣きそうな顔をしていた。

例の事故の後、葵は家族と一緒に九州の方へ引っ越しをしたと言っていた。事故が直接の原因ではなく、たまたま親の転勤で決まったことらしかった。

だから、わたしが葵のことを憶えていなくても、生活していく上で何ら困ることはなかったのだ。ずっと近くにいなかったから。

だからといってそれでいいわけがない。

忘れられていた、というのは葵にとって大きなショックだったろう。

十年ぶりに会った幼なじみが自分の事をきれいさっぱり忘れていたなんて、悲しくて寂しいことだと思う。

「忘れてしまつてごめんなさい」――葵に向つてそう言いたかったけど、わたしは言えなかった。

だって、わたしはまだ思い出せないからだ。

葵のことも事故のことも、話を聞いただけでわたし自身が思い出した訳ではない。

謝ることさえもできない。

それがもどかしくて辛かった。

「やっぱり、聞くの止めた方が良かった？」

妃実ちゃんの言葉に、わたしは首を振った。

「そうは思わない。ちゃんと聞いて良かったと思うよ……ただ思い出せないのが悔しいの」

また涙が浮かんできてしまった。

きつと精神的に不安定な状態なのだろう。気持ちがざわついてうまくコントロールできなかった。

妃実ちゃんがズルズルとわたしに近付いてきて、布団の中でわたしの手をぎゅっと握った。

「妃実ちゃん？」

「あんたさあ、子どもの頃から泣き虫で、よくなんだかんだで泣いては私の手をこうして握って付いて回ってたよね」

ため息交じりの妃実ちゃんの言葉に、わたしは思わず笑ってしまった。

「それ、ずいぶんちっちゃい頃の話でしょ」

「まあね。でも、今でもこうしてると少しは落ち着かない？」

ニツと笑う妃実ちゃんに、わたしは頷いた。確かに、妃実ちゃんの手は落ち着く。ずっと昔から知っている「お姉ちゃん」の手だ。

「ありがとう」

「……里珠さ。私、葵の事は無理して思い出さなくてもいいと思うよ」

「え？」

思いがけない言葉に、わたしは思わず半分体を起こした。わたしを見返す妃実ちゃんの顔からさっきまでの笑みは消えていた。

「里珠には、ちゃんと昔の記憶はあるじゃない。私と遊んだことも、大和との思い出もちゃんと憶えている。これまでそれでなんの不都合もなかったでしょう？ 頭が痛くなったり息が苦しくなったり…

：そんな思いしてまで葵の事思い出さなくてもいいよ」  
「だけど！」

思わず声が大きくなってしまった。隣の部屋では当の葵が寝ている。これぐらいの声、聞こえはしないと思うけれど、慌てて声を顰めた。

「だけど、それじゃ葵が――」

「葵がかわいそう？」

後を継いだ妃実ちゃんに、わたしはぐっと言葉を詰ませた。妃実ちゃんの視線が鋭くなった。

「かわいそう？ 憶えてなくて葵に悪い？ そんな気持ちで自分の体を痛みつけるの？ あんたが発作起こして苦しむたびに、周りの人が――あんたの両親とか大和がどれだけ心配してきたと思っているの？ またこれからもそういう心配をかけ続けるの？」

妃実ちゃんの言っていることはもっともで、押し殺した声が逆にわたしの心を鋭く抉った。

自分ではほとんど憶えていないけれど、きっと、わたしはこれまで周囲の人にたくさん心配をかけて来たのだろう。それを見ていた妃実ちゃんだから言えるのだ。

何も言い返すことができなかった。妃実ちゃんの表情が和らいだ。

「――厳しいこと言ってごめん。だけど、これが私の気持ちだよ」

妃実ちゃんはようやくわたしから視線を逸らした。わたしも枕に頭を落ち着けたけれど、さっきまでとは違う苦しさが胸を渦巻いていた。頼もしく感じていた妃実ちゃんの手をそっと離し、横になっ

て妃実ちゃんに背を向けた。背後で妃実ちゃんが小さく笑ったのがわかった。

「私、事故のことを里珠に教えるのは反対だったの。葵のことも、ただの大和の友達ってだけで済ませておけばいいよって言った。思いつきなくてもいいことってあるのよって。最初はそれで大和も葵も納得していたのに……結局こうなっちゃったのね」

「妃実ちゃん」

「ん？」

「葵がかわいそうだからじゃないの」

わたしは妃実ちゃんに背を向けたまま続けた。

「わたしが葵を思い出したいの。思い出さなきゃいけないって、そう思うの」

憶えていなくて申し訳ないとも思う。だから思い出したい——その気持ちには当然だ。だけどそれ以上に、葵の眼差しに胸が痛む——切なく感じるその理由が知りたかった。

「わかってるよ」

思いがけなく、優しく妃実ちゃんが言った。

「里珠は思い出したくて当たり前だよ。勝手な事言ってごめん。——私、もう寝るわね。里珠も少しでも眠った方がいいわよ」

今度は妃実ちゃんが寝がえりを打つ気配がした。近くに感じていた体温が遠ざかる。わたしは小さく言葉を返した。

「おやすみ、妃実ちゃん……心配掛けてごめん」  
「……おやすみ、里珠」

それきり妃実ちゃんとの会話は途切れ、わたしもそっと目を閉じた。



眠れないと思っていたのにいつの間にかしつかりと眠ってしまった私は、窓からの日差しの眩しさに目を開けた。

隣に寝てたはずの妃実ちゃんの姿はすでになかった。布団も端にきちんと畳まれてある。何時だろうと思って周りを見回してみただ、この部屋に時計は置いてないようだ。それでも太陽の高さからしてけっこういい時間だとはわかる。

わたしは布団を手早く畳んで部屋を出た。

勝手知ったる大和の家だ。行動に迷うことはなく、リビングに顔を出す前に洗面所に向かい顔を洗った。やっぱり寝起きの顔で人会いたくはない。

さっぱりとしたところで改めて鏡の中の自分を眺める。

——酷い顔している。

昨夜泣いたせいか、瞼が腫れぼったい。目の下にはしっかりとクマまで作って。心持ち顔全体がむくんでいるし、ろくに化粧も落とさず寝たから、肌はくすんでしまっている。

「化粧……」

バイト帰りのままだから、バッグの中にメイクポーチは入っているはずだ。化粧をすることはできる——けど、無駄なあがきだろう。それにそんな気分にもなれなかった。

諦めのため息をついた時、廊下から人の足音が聞こえた。とっさにこちらに来るのかと身構えたけれど、足音はすぐに遠くなり、わたしは胸をなでおろした。

大和だろうか。妃実ちゃんかもしれない。それとも葵……。  
その人の顔を思い出すと、ぐっと体が強張った。

葵——彼は幼なじみ。そう聞かされた。だけど、一晩経ってもわたしの中の記憶は甦る気配もない。ただ、切なくなるほどの懐かしさを胸に感じるだけ。

これは不確かな、感覚的なもので、記憶とは違う。

「ちゃんと思いつけるのかな……」

記憶を失った原因が葵と共に遭った交通事故にあって、それを思い出そうとするとわたしの体が拒絶反応を起こすかのように発作を起こす。頭痛だったり、呼吸困難になったり。

それはたぶん、幼かったわたしが交通事故の事実を受け入れなかったからなのだろうと思う。

もしも今、それを受け入れることができれば、発作など起こすこともなく、葵のことも思い出すのだろうか。

「フ……」

なぜか笑いが漏れた。

まるで他人事のような気がする。まさか自分が記憶喪失だったなんて、これまでまったく思いもしなかった。やっぱりなかなか信じられない。

だけど、これが現実なんだろう。だったら受け入れるしかないのだ。

わたしは鏡の中の自分を見つめ、気合を入れるかのように頬を両手でピシヤリと叩いた。

＊

＊

＊

リビングに入りまず時間を確かめ、わたしは軽く驚いた。もう十時だ。

大学はもう午前中は間に合わない。いまさら焦っても仕方がないし、あっさりと諦めた。ついでにもう午後も休んでしまおう。運良く、今日は休んでもたいして差し支えのない講義ばかりだった。

「あ。おはよう、里珠。ゆっくり眠れた？」

ソファアーに座って新聞を読んでいた大和が顔を上げた。

「なんか飲むだろ？」

そう言ってやさしく笑いながら立ち上がる。そのいつもと変わらない笑顔に少し気持ちちが和んだ。

「ありがとう。でも自分でやるよ」

「いいから、座ってろって」

「でも……」

答えながらさりげなく周囲を見回す。やっぱり大和以外は誰もいない。キッチンでサーバーからコーヒーを注ぎながら大和がクスツと笑った。

「葵ならもう出掛けたからいないよ」

——見透かされている。気恥しくなりながらも、その人がいないことにホツとしてしまった。やっぱり、葵と顔を合わせるのが今は

少し怖い気がした。

「出掛けたって、どこに……まさかまたあの——」

「河川敷の方まで行ってくて、俺の自転車借りてった」

大和がさり気なく答えた。あの横断歩道のことにはわたしが触れないようにしてくれてるのかもしれない。

「とりあえず座って」

「うん」

ソファアに座ると大和がカップを渡してくれた。わたしの為に入れてくれたコーヒーは、ぬるめのカフェオレ。手にカップを持っても熱くない。わたしが熱いのが苦手なのを大和はよく知っている。大和がわたしの隣に腰を下ろし、静かに肩に腕を回してくれた。その感触に思わず目を閉じた。ホッとすると……わたしにとって大和の腕の中は落ち着く場所の一つだ。

「妃実ちゃんは？」

「朝早くに帰ったよ。一度家に帰ってから学校行ってくてさ。休めない講義があるらしい。——里珠にごめんって伝えてって言われたけど」

「妃実ちゃんが？」

目を丸くしたわたしの顔を大和が首を傾げて覗きこむ。

「昨日、妃実香と何か話したか？」

昨日の妃実ちゃんとの会話を思い出し、わたしはなんとなく妃実ちゃんの「ごめん」の意味を理解した。でもそれは謝ってもらうこ

とではないのだけど。

「……葵のこと、無理に思い出すなって言われた」

大和は黙ってわたしの言葉に耳を傾けた。

「わたしが発作起こして苦しむたびに、大和やわたしの両親がどれだけ心配するかわかってるのかって」

「……そう」

「昔の事故のこと、わたしに教えるの妃実ちゃんは反対だったんだってね」

大和は長い息をつきながら天井を仰いだ。

「それは妃実香だけじゃなくて、俺も同じだったよ」

そう言うとき大和はしばらく黙りこんでしまった。何かを考えているのか、一点を見つめたまま視線すら動かさない。

やがて、長い吐息と共に目を閉じると、小さな声で話し始めた。

「あの日葵が急にやってきて俺は……とにかく戸惑った。突然やってきた幼なじみを前に俺が感じたのは『懐かしさ』よりも前に『恐れ』だったよ」

「恐れ？」

思いもしない言葉について繰り返すと、大和は小さく口許を歪めただけで話を続けた。

「あいつを里珠には会わせたくなかった。だけど、それもできず……ならば、せめて、事故のことや昔のことには触れないでくれと葵

に言った」

「……」

大和が再びわたしの目を覗き込んだ。

「俺、酷いだろ？」

「え？」

「幼なじみに平気でそういう事を言えたんだ、俺は。葵は里珠との再会を喜んでいたのに、それを隠して初対面のふりをしろと言ったんだよ」

自嘲するような大和の言葉にチクリと胸が痛んだ。確かに、葵のことを思えば大和の言葉は残酷だ。だけど、大和はわたしのためにそう言ったんだ。大和に残酷な言葉を言わせたのはほかでもない、わたしなのだ。

「……ごめん」

つい声を落としたわたしの頭を大和がくしゃくしゃと撫でた。

「里珠が謝るな。里珠は何も悪くはない」

——そうだろうか。自分にとって辛い記憶を消して、周りの人たちに心配をかけてるわたしが「何も悪くない」——そういうことがあるわけがない。

だけど、何を言っても大和はわたしを庇うだろう。それがわかって何も言えなかった。

「結果的には昨日のようなことになってしまったけど……それだけ葵は……」

大和はそれ以上言葉を継がなかった。

急に静まり返った室内に、時計の秒針の音がやけに大きく聞こえた。

この部屋は明るい日差しに溢れているのに、ここにある空気は暗くて重い。まるで大和の心がそのまま漂っているかのような気がした。

幼なじみの心を傷付けていたことに大和も深く傷ついている。

それがわかるのに、わたしにはどうすることもできなかった。

わたしの記憶がない――それが一番の元凶。それなのに、自分では何もできない。それが悔しい。

だけど、こんなわたしを大和は守ってくれようとしていた。それは痛いほどわかって、こんな状況なのに嬉しく感じてしまう自分勝手なわたしもいる。

わたしは手にしたカップを口に運んだ。適度に温かったカフェオレは、もうかなり冷めてしまっている。それでも甘い優しい味がした。

「――美味しい」

わたしがそう言って笑うと、大和がふわりと表情を緩めた。そして、ゆっくりとわたしの額に口付けた。

「……好きだよ」

そのストレートで唐突な言葉に、わたしは目を見開く。

いつもなら照れ隠しに茶化して返すところだけど、今の大和の声はそれができないほど真剣な響きで、わたしの心を大きく揺さぶっ

た。

そういえば、この前の電話でも突然こんなことがあったような気がする。

「大和……？」

思わず首を傾げると、大和はささやかな微笑みを返してくれた。

「里珠。この先里珠の記憶が戻って、里珠がどんなことを思い出しても……里珠の気持ちがどんなに動いても、俺のこの気持ちは揺るがないから。それは憶えておいて欲しい」

それは耳に心地いくらい静かな声だったけれど、なぜだか泣きたくなるほど切なくなった。

「……どうしてそういうこと言うの？」

小さく聞き返したわたしに大和はただ微笑んで、もう一度額にキスをくれただけだった。

(第1話 おわり)



一人っ子だったわたしは、近所の同じ年頃の子どもたちが兄弟代わりのようなものだった。近所には小学校も幼稚園もあったせいの子どもの住む家は多く、遊び相手に困ったことはなかった。

その中でも、とりわけ大和と妃実ちゃんとはよく遊んだ。大和はわたしと同じ一人っ子だったし、妃実ちゃんは三つ年上のお兄さんがいるだけだったから、年下のわたしを妹のようにかわいがってくれた。成長していく中で疎遠になっていく友達も多い中、今になっても親しくしているのは、やっぱりこの二人ぐらいだ。

子どもの頃を思い出せば、必ずと言っていいほど二人の姿があった。それだけ三人で一緒に過ごした時間が多かったのだろう。

だけど、その記憶には大きな欠落があった。

一緒に遊んでいたのは、三人ではなく四人だった。

大和と妃実ちゃんの他に、もう一人一緒に時を過ごした友達があった。

それが久遠葵。

わたしと同じ年の男の子。

わたしが記憶の中から消してしまった男の子。

\*

\*

\*

昨日は丸一日寝込んでしまった。

その前日に聞いた過去の事故の話は、自分が思っていたよりも精神的にかなりの負担をかけたようで、結局、わたしは熱を出してしまったのだ。でもお母さんにはそれを伝えず、ただの寝不足だと説明した。過度な心配はかけたくなかった。

そして、今日。何の予定もない休日。

熱は下がったけどベッドの上でゴロゴロしながら、過去の記憶を辿り寄せてはあまりの頭痛に断念し……を繰り返していたわたしはあることを思いついて体を起こした。

自分の部屋を出てリビングへ向かう。

リビングではお母さんがこまごまと物置棚を片付けていた。

「お母さん、ちょっといい？」

「なあにー？」

振り向きもせず返事をするお母さんに構わず、わたしは言った。

「わたしの子どもの頃のアルバムとかすぐ出せる？」

ピタリ、とお母さんの手が止まった。だけど、お母さんはすぐに手を忙しく動かし始めた。わたしの方を見ないままだ。

「無理よ」

予想通りの答えだった。

「すぐには出せないわ。奥にしまいこんでるから」

いつものお母さんの口調。でもその中にほんの少しの動揺が含ま

れている。以前のわたしには気付かなかったであろう本当に小さな動揺。

「――急にどうしたのよ。子どもの頃のアルバムなんて」

お母さんがようやくわたしを見て首を傾げた。どこか探るような視線――わたしはあえて自然を装った。

「別になんともなくよ。無理ならいいの。ああ、そうだ。あとからちよっと出掛けてくるね。約束があるの」

「そう？ どこに行くの？」

「大和のところ」

わずかに、不自然な間。すぐに小さなため息が返って来た。

「そう、大和くんね……ちゃんと早めに帰ってきなさいよ」

「うん、わかってるよ」

お母さんの声に滲んだ微かな警戒の色にも気付かないふりをする。一昨日――葵のことを知ったあの日、結果的に外泊してしまったわたしに、当然のことながら両親はあまりいい顔をしなかった。帰宅後、寝不足と言いながらそのまま部屋に引きこもってしまったわたしの態度もいけなかったのだろう。

これまで100パーセントに近かったお母さんの大和への信頼は、確実にガクリと落ちてしまったと思う。それは残念に思うけれど、だからといってその後もわたしは何も弁明はしなかった。そんな余裕がなかった、という方が正しいかもしれない。

両親には、大和から過去の事故の話を聞いたことを伝えてはいない。

何故勝手に話をしたのかと大和たちが責められることは明らかだったからだ。あんなに重大なこと、親の許可もなく勝手に打ち明けられたと知ったら両親はどう思うのか、考えなくてもわかる。そうになると、大和との交際自体を反対されることになるかもしれない。たし、妃実ちゃんとの関係も悪くなる。それだけは嫌だった。

もちろん、「久遠葵」という人物が今近くにいることも話してはいない。

言えば確実に葵とは会えなくなるような気がした。

それも嫌だった。

せめて、ちゃんと葵を思い出すまでは、両親には黙っていようと思った。

だから、家ではこれまでとなんら変わらない態度をとる――表向きは。

だけど、本当は違う。

失ってしまった記憶を求めて、まるで何かに追い立てられるかのような焦燥感をわたしはずっと感じているのだ。

家を出ると真っ直ぐに大和の家に向ったが、大和の家から返答はなかった。本当は約束なんてしていなかったから無理はない。

さして落胆もせず、わたしはそのまま駅の方へ足を向けた。

大学のある一つ手前の駅近くに、大きな図書館がある。そこに行けば、過去の新聞記事なりを見つけられるかもしれないと考えた。

わたしが記憶を失うことになった事故――まずは、それを知るところから始める。

だけど、大和の家を離れてからまだ数分も経たないうちに、わた

しは足を止めることになった。

正面から歩いてきてるのは――葵。

葵はわたしに気付くと軽く目を見開いて、少しだけ足を早くして歩み寄ってきた。

「どっか出掛けるの？」

遠慮がちな様子でそう話しかけてくる。そういえば、あの日以来顔を合わせたのは初めてだ。気まずい、というほどではないが、わたしもやっぱり少しだけ緊張してしまった。

「う、うん。図書館に」

「そう。課題か何か？」

首を傾げる葵。わたしは一瞬迷ったものの、正直に話すことにした。葵も無関係ではない。

「昔の事故のこと、知りたいと思って」

「事故のこと？」

葵は顔を曇らせた。

「……そのこと、大和に話した？」

わたしは小さく首を振った。

「今家に行っただけど留守だったから」

「……だったら、止めた方がいいと思うけど」

「え？」

戸惑ってしまった。まさか止められるとは思わなかった。

「でも、葵はわたしに思い出して欲しいと思ってるんでしょう？」

葵は困ったように頭を掻いた。

「それは……オレが言いたいのは、一人で図書館に行って調べるとかはやめた方が良くないじゃないかって。だって里珠、またあんなことになったら……」

「あ……」

葵は言葉を濁したが、言いたいことはわかった。一昨日、葵の前で気を失ったばかりだ。そのことを指しているのだろう。

そういえば、大和にも同じような事を言われていたのを思い出した。決して一人で無理をするな——そう言われていたっけ。

わたしはがっくりと肩を落とした。そうか、一人でやろうとするのは、結局心配をかけてしまうことになるのだ。

「あのさ」

ため息をついたわたしに、葵が気を取り直すように言葉をかけた。  
きた。

「大和、オレに昼飯のこと聞いてたから、たぶんすぐに帰ってくると思うんだけど。オレ、鍵預かってるから中で待ってたら？」

顔を上げたわたしに、葵はニヤツと笑った。

「あー、変な警戒はするなよ。間違っても人の彼女に手を出すような真似はしないから」

「あ、当たり前でしょ！」

思わず大きな声で返してしまったわたしに、葵は可笑しそうに声を上げて笑った。

＊

＊

＊

「最初はね、大和に子どもの頃のアルバムでも見せてもらおうかと思っ  
て来てみたんだ。家では見せてもらえないから」

「アルバム？」

葵が軽く目を見開く。

今わたしたちは、大和の家のダイニングで二人で向かい合って話  
をしている。

わたしは葵が入れてくれたコーヒー（といってもインスタント）  
を一口飲んで頷いた。

「昔の写真にはわたしたちが一緒に写っているのもあるんじゃない  
かって思って。それ見たら何か思い出すかなーとか」

「なるほどね」

葵はゆっくり頷いて、カップを口に運んだ。その仕草をなんとなく  
見ながら、わたしは密かに息をついた。

今さらながら、葵はかなり見た目が良い。すれ違う人が振り向く  
ような——と言っても過言ではないくらいだ。子どもの頃もきつと  
かわいかっただろうな、と想像がつく。それを思い出せないのがな  
んだか歯痒かった。

「昔の写真か……オレもずいぶん長いこと見てないな」

そう笑って葵が目を伏せる。

肌がきれい。まつ毛が長い。そんなことばかりに目がいった。見惚れてしまっていたのかもしれない。顔を上げた葵と目があった時はかなり焦ってしまった。

「そ、そうなんだ。じゃあ、大和が帰ってきたら、一緒に見せてもらおうよ」

早口になってしまったわたしに葵は小さく笑い、「そうだな」と頷いた。

「里珠は記憶を取り戻したいと思ってる？」

当たり前の問いかけに、わたしは首を傾げた。

「そりゃあ。葵はわたしに思い出して欲しいと思うでしょう？」

「……」

無言。

「葵？」

その沈黙がどういう意味なのかと口を開きかけた時、葵が不意に立ち上がり、リビングの方へ向かった。わたしもつられて立ち上がって、そんな葵を目で追った。



「里珠にはオレの記憶がない、という話を聞いた時はショックだった」

歩きながら、葵は静かにそう話し出した。

「思い出して欲しいってそう思ったよ、切実に。だけど……」

それ以上は言葉を続けず、葵はリビングの奥にあるグランドピアノの元へ行った。そつと蓋を開けて鍵盤をそつと指で撫でる。

「このまま思い出さない方がいいのかも、って思うようになった」  
「ど、どうして？」

思わず近寄ってそう問い詰めた。葵はわたしにチラリと目を向けると、微笑んでそのままピアノの前に座った。

「辛い記憶は消してしまった方が幸せだから」

その言葉と同時に、ピアノが音を奏で出す。  
葵の指が優雅に鍵盤をなぞる。滑らかなその動きに思わず目を見開き、聞こえてきたその音楽にわたしは言葉を失った。

心臓が飛び出すかと思った。

聞こえてくるのは、決して忘れられない曲——エンターテイナー。目の前が白く弾けた。

——わたしの隣で音を奏でる男の子。

——二人でかわしたハイタッチ。

——輝くような笑顔。

——波紋のように揺らぐ、その笑顔は——

「忘れて欲しくない楽しい思い出もある」

葵の声にハッと我に返った。葵は曲を弾き続けている。わたしの心臓の鼓動は信じられないくらい早くなっていた。

そして、わたしは気付いてしまった。

「だけど、それはオレが憶えていればそれで十分——この前、苦しんでいた里珠を見たらそう思えてきた」

穏やかにそう話す葵の右顎にある黒いほくろに。

——わたしの隣で音を奏でる男の子。

——いつも見ていた、その横顔。その子の顎にはほくろがあった。

——揺らぐ笑顔が次第に鮮明になる。

——はつきりと——

「っ！」

刺すような頭痛にギュッと目を閉じたのと、リビングのドアが開く気配がしたのはほぼ同時だった。ピアノの音が止まる。

「おかえり。大和」

葵のその声に、わたしは背後を振り向いた。そこには今しがた帰ってきたばかりの大和がいる。

「ただいま。里珠、来てたのか。なんだ、今弾いてたの、葵？」

呑気にそう言いながら近付いてくる大和。葵が笑って答えた。

「そう。懐かしくなって。このピアノ弾いたの久し振りだ」

「だろうな——里珠？」

大和がわたしを見て、表情を曇らせた。

「どうした？ 顔色が悪い」

言いながらわたしに手を伸ばしてくる。

「！」

わたしは咄嗟に体を引いた。驚いたような顔をする大和に、わたしもハツとした。大和の手を避けたのはほとんど無意識だ。でも――

「わたし……ごめん」

わたしは逃げ出すようにその場を離れた。

「里珠！？」

戸惑う大和の声にも振り向かず、部屋を出た。

どうしようもなく混乱して、どうしたらいいのかわからない。大和の家を飛び出し、そのまま行き先も考えず駆け出した。

忘れたくない、と思っていた笑顔。その笑顔はいつも揺らいでいてはつきりしなかった。

だけど、ちゃんと「わかっている」からいいと思っていた。

あの笑顔は、わたしの大好きなあの人のもの。

初めて一緒に連弾した初恋の人のもの。

そう、初恋の人——柚木大和の笑顔。

ずっと、そう思っていた。

気が付けば、わたしはあの児童公園に来ていた。

あの日、葵が立っていたあの横断歩道が見える児童公園だ。

走ってきたせいで、信じられないくらい動悸が激しい。息が苦しくて、たまらずベンチに腰を下ろした。遊んでいた子どもたちが好奇心旺盛な目を向けてくるけど気にしてはいられない。そのまま蹲るように頭を抱えた。

——違う。

その言葉がぐるぐると頭を回っていた。

違う、違う、違う。

なんということだろう。

わたしの記憶は間違っていた。

耳に残った音楽と、目に焼きついた葵の横顔が頭に浮かぶ。その横顔と、わたしの隣でピアノを弾く男の子の顔が重なる。

ずっと大和だと思いこんでいた男の子の顔と。

「なんてこと……」

泣きたくなった。

違っていた。そのことに心が乱れる。

一緒に連弾をしたのは、大和じゃなかった。葵だったのだ。

わたしの初恋の人は大和ではなく、葵だったということだ。

体が震えてくる。

わたしは、これまで何度大和にこの話をしただろう。

『一緒に連弾をした』『あの時から好きだったんだよ』

そう何度伝えただろう。大和はその度黙って笑って受け止めてくれていたけれど、大和はそれをどういう気持ちで聞いていたんだろう。

大和は当然わかっていたはずだ。

わたしが誰を指して「初恋の人」と言っていたのか。

それが本当は自分じゃないことを知っていたはずだ。知っていて、笑って受け止めてくれていた。

「大和……」

わたしはどれだけ彼を傷付けていたのか——考えるのが怖かった。これからどうという顔をして会えばいい？

「里珠？」

その声に弾かれたように顔を上げた。訝しげな顔をした妃実ちゃん。わたしの顔を見下ろしていた。

「バツカじゃないの？」

妃実ちゃんは呆れた声で一言そう言い放った。

「バカって……」

わたしは紅茶のカップを口に付けながらシュンと肩を落とす。妃実ちゃんの口の悪さは慣れているけど、さすがにガーンとくるものがある。

公園でわたしを見つけた妃実ちゃんは、そのまま自分の家までわたしを連れて来てくれた。妃実ちゃんいわく、その時のわたしは迷子になった子どもみたいで放っておけなかったらしい。

妃実ちゃんはわたしを部屋に通すと、自分は一度部屋を出て、すぐに二人分の紅茶を持ってきた。マドレーヌまで添えてある。多分、妃実ちゃんのお母さんが用意してくれたのだろう。そして、なんとなく落ち着いたわたしから事情を聞き出した妃実ちゃんの第一声が、あの「バツカじゃないの？」である。

「何へこんでるのかと思ったら、そんなこと」

妃実ちゃんはなぜか怒ったような口調で続ける。

「そんなの、ちょっとした記憶違いってだけじゃない」「ちよっとした？」

わたしはついムキになって言葉を返してしまった。

「大きな記憶違いだよ！　大和だと思ってたのが本当は葵だったなんて……」

口にするとまた気分が悪くなってきた。

「……わたし、ずっとあの連弾の相手は大和だって思ってた。わたしの初恋は大和だと思ってたのに……しかも、その話をこれまで何度も大和に……」

罪悪感で押し潰されそうだ。

少しの間の後、妃実ちゃんの大きなため息が返って来た。

「里珠が混乱するのはわかる——気もするけどね。そんなに気に病むことじゃないでしょ？」

「気に病むよ！　だって——」

「まあ、落ち着いてよ、里珠」

ムキになるわたしを、妃実ちゃんはちょっとだけ笑って窘めた。

「あんたにとっては、今日突然わかった衝撃的な過去なのかもしれないけれど、大和やわたしにとっては、それ、知ってて当たり前の過去の話だから。里珠の記憶違いも」

「——！」

知ってて当たり前の過去。

——言葉が返せない。

妃実ちゃんは表情を和らげて続けた。

「里珠がその記憶違いを大和に話したらしい頃——確かあんたたち

が付き合い出した頃だっけ？　――は、さすがに大和も悩んだみたいよ。里珠が初恋の相手を自分だと勘違いしているってね」

「大和が……？」

「うん。そのことで一度愚痴こぼされたの。でも、その時私大和にこう言ってやったわ。『バカじゃないの、悩むだけ無駄でしょう？』って」

「ば、ばか？」

「そ」

妃実ちゃんはケロリと頷く。

「里珠の――葵に関する記憶に触れることは、いわばタブーみたいな感じだったから、大和が里珠に『その記憶は間違っている』と指摘するわけにもいかなかったし、結局は黙って受け入れることしかできないじゃない。悩むだけ無駄よ」

「葵に関する記憶に触れることがタブー」……妃実ちゃんは軽く言うけれど、わたしにはかなり重い話だ。そうやってみんなでわたしに気を使っていたのだ。

つい俯いてしまったわたしに、妃実ちゃんはこれまでより優しい調子で続けた。

「別に、里珠の記憶がないことを責めた訳じゃないのよ。過去の記憶に振りまわされて悩むのが無駄よ、と言いたかったのよ。あんたにとっても大和にとっても、今一番大事なのは、過去のことじゃなくて現在いまのことでしょう？」

「現在……？」

その言葉に顔を上げた。その言葉はなぜかとても新鮮に聞こえた。ずっと過去の記憶のことばかり考えていたからかもしれない。



「里珠。今日あんたが思い出した記憶は、確かにあんたにとってもショックなことだったのかもしれない。だけど、それが何なの？ 初恋の人が本当は葵だったと思い出したとして、それで今が何か変わるの？ 今の大和への想いまでも変わるの？」

「え？」

妃実ちゃんが、探るようにわたしの目を覗きこんできた。力強い目。

だけど、わたしはその目を真っ直ぐに見返すことができなかった。言われた言葉に自分でも驚くほど動揺してしまったのだ。

今が変わるとか変わらないとか——答えられない。

「わ……わかんないよ」

妃実ちゃんの視線を振り払うように、ブンブンと首を振った。

「あの連弾の記憶は絶対に忘れたくないものだった。そんな思い出を共有してるのが大和だと思うと、本当に嬉しかった。だけど、それが全部わたしの記憶違いだったって……大和じゃなかったなんて……葵があの人だったなんて」

もう自分でも何を言いたいのかわからなかった。混乱して考えがまとまらない。

そんなわたしの耳に、妃実ちゃんのもう何度目かのため息が届いた。

「あんた、本当にバカだわ」

冷たい声音に、ビクリと肩が震えた。これまでと違った冷めた空

気がわたしの混乱を鎮めていく。

「葵の記憶が一つ戻っただけでそんなに動揺されてしまったら、あまりにも大和が不憫だわ」

不憫——その言葉にわたしは反射的に顔を上げた。妃実ちゃんは声と同じ冷たい目をしてわたしを見つめている。本気で怒っているのだとわかった。

「大和は里珠の記憶がどうであれ、ずっと目の前にいる里珠だけを見てきたのに、あんたは何なの？ あんたは今まで、大和ではなくてただ初恋の人を見てたの？ 大和が初恋の人だと思ってたから好きになったの？ だから、本当は大和じゃなくて葵だったと思い出した途端、もう大和のことは好きじゃなくなったってわけ？」

「ち、違う！」

「違うじゃない」

わたしの否定を妃実ちゃんはあっさり跳ねのけた。

「あんたが言ってるのは私にはそう聞こえる。『わたしは自分の初恋の人だったから大和と付き合っていました。だけど間違っていました。どうしたらいいですか？』そんなふうに聞こえる」

妃実ちゃんの突き放したような冷たい物言いに、わたしははぐつと唇をかみしめた。

妃実ちゃんの言っていることはわかる。だけど、そうだと認めたくない——でも、一言も言い返せなかった。

妃実ちゃんはいくらもわたしをじっと見つめたあと、何かを決意したように口を開いた。

「……里珠がそんなんだったら、私が大和のこと貰うわよ」  
「——え」

今度は驚きで言葉が出なかった。

大和を貰う……？

妃実ちゃんは冗談を言っているような顔じゃない。まるで挑発するような目でわたしを見ている。ふざけて言っているのじゃないことだけはわかった。

「大和を貰う、って、大和は物じゃないからこんな言い方は失礼ね——大和を私の方へ振り向かせる、と言えばいいのかな」

ニツと唇の端を上げて笑う妃実ちゃん——それはわたしの知っている陽気な彼女ではなく、ただの「女の人」だった。

まさか、妃実ちゃん、大和のこと……？

戸惑うわたしに、妃実ちゃんはいっそう笑みを深くした。

「今初めて気付いたって顔してるね。ほんとと、里珠って鈍いよね。昔から変わらない、その鈍さ」

妃実ちゃんがようやくわたしから目を逸らして、クスツと笑った。わたしは思わずホツとため息をついた。だけど、まだ話が終わったわけじゃない。心を決めて、今度はわたしから妃実ちゃんに詰め寄った。

「妃実ちゃんは大和のことが好きなの？」

「ええ、好きよ」

即答だった。妃実ちゃんが再びわたしの方を向く。嘘のない真っ直ぐな目で。

「ずっと好きだったのよ。それこそ、私の初恋だもの、大和は」

妃実ちゃんの告白に、わたしはただ目を丸くした。初めて聞くことだった。

「知らなかった……」

「そうよね、言わなかったもの。でも、気付かれても仕方ないっていうぐらい、態度には出たはずなんだけどね」

そうなのだろうか、と戸惑うわたしを見て、妃実ちゃんがおかしそうに笑う。

「大和にはね、一度高2の時に告白して振られてんの。その時言われたわ、『わかってた』って。それぐらい、私態度に出てみたいよ。気付かなかったのは里珠だけね」

「そ、そうなんだ……」

そんな過去が大和と妃実ちゃんの間にあったなんて、想像したこともなかった。……驚きだ。

「それから何人かの男の人と付き合ったけど——私が好きになる人って、結局大和に似てる人だったりするのよね。背の高さ、髪型、話し方に声のトーン……それに気付いた時、私がつくりきたわ。まだ大和のこと忘れてない自分に」

妃実ちゃんは唇を湿らせるように一度紅茶に口を付けると、再び続けた。

「このままじゃ駄目だ、ちゃんと自分にけじめをつけないと。もう

一度当たって砕けちゃおう——って思って覚悟を決めた時、大和と里珠が付き合いだしたのよ」

それが一年前。そう言って妃実ちゃんは自嘲的に微笑んだ。

「大和が昔から里珠のことを大事に思ってたのは知ってた。でも、認めたくなかったの。その好意は妹に対するようなものだろうって思いたかった。だからね、二人が付き合いだしたって聞いた時は、ああ、同情したからなのね、って」

「同情？」

「そうよ。子どもの頃の事故で記憶を失っている可哀想な『妹』に同情して、付き合ってやることにしたのかなって——そう思いこもうとした」

妃実ちゃんが初めて俯いた。

「最低でしょ？ 口では『良かったね』とか言いながら、心の中ではそんなふうに思ってたの。二人を応援してやる気なんてこれっぽちもなかった。ちよつとでも隙があったら割り込んでってやろうって思ってた」

「妃実ちゃん……」

「でも、時間が経つうちにそれもバカバカしくなってきたね。だって、あんたたちなんだかんだでお似合いなんだもの。私の付け入る隙なんてないなあって思い始めてた。でも、その矢先がこれよ」

笑いを潜め、妃実ちゃんが息をついた。

「葵が来て、里珠の記憶が戻り初めて——本人はなんだか混乱して初恋の相手が大和じゃないからどうしよう、みたいなこと言うし……なんだかすごく腹が立ったわ」

妃実ちゃんの衝撃の告白（少なくともわたしにとっては）を聞いてる間に少しでも冷静になったわたしにも、その気持ちはとてもよくわかった。

わたしは妃実ちゃんの心を踏みにじるようなことを言っていたのだ。自分だけが困ったような顔をして。自分のことだけしか考えていなかったことが恥ずかしくなった。

「妃実ちゃん――」

一言だけ謝ろう、そう思っていたのだけど、

「――ごめん」

先にそう声を発したのは妃実ちゃんの方だった。

先手を取られて目を見開くと、妃実ちゃんは表情を和らげて微笑んだ。そこに微かに苦いものが滲んでいる。

「ごめん、里珠。なんか私すごく自分勝手な事ばかり言ったわ。里珠の記憶の混乱は、きっと他人が想像できるほど単純なものじゃないだろうにね。ごめん、私わかったようなこと言って……呆れるね」

妃実ちゃんが自嘲するように呟く。わたしはつい力いっぱい首を振った。

「そんなことないよ」

それはただの気休めの言葉ではなくて。

「妃実ちゃんが話してくれたおかげで、わたしも少しでも冷静になった気がするから……妃実ちゃんの気持ちも聞けて良かったと思う

し」

知らないでいるよりはずっと良かったと思う。

「気にならないと言えば……嘘になるけど」

妃実ちゃんは一瞬きよとした後、プツと小さく吹き出した。

「里珠って本当に……バカね」

そう言って笑う妃実ちゃんは、さっきまでの剣呑な雰囲気は嘘のように穏やかな顔をしていた。

「でも、本当に、隙あらば頂くからね。言ったからにはもう遠慮はしないから」

そう言った顔はちよつと意地悪だったけど。

この後、顔色が悪いから少し休めと妃実ちゃんに説得されて、わたしはこのまま妃実ちゃんの部屋で仮眠をとらせてもらうことにした。

自分が思っていた以上に疲労していたのか睡魔はすぐにやってきて、わたしの意識は緩やかな夢の中へと吸い込まれていった。

＊

＊

＊

妃実ちゃんの家で思いのほかたっぷりと睡眠をとってしまい、起

きた時はすでに夕方の七時近かった。わたしが寝ていた間、妃実ちゃんはずっと課題のポスターの図案を描いていたらしい。だから気にするなど笑っていたけれど、せっかくの休みにベッドを占領して、なんだか悪いことをしてしまった。

おばさんからはついでに夕食もと誘われたけれど、それはさすがに断った。遠慮したこともあるけれど、この数日心配かけっぱなしの両親のことを考えると、今日は家に帰るべきだと思ったからだ。

妃実ちゃんちからわたしの家までは十分もかからない。すぐに家に帰ると電話すると、お母さんは明らかに安心したようだった。やっぱり、かなり心配掛けているようだ。この二日間のわたしの様子がおかしいことにお母さんは何かを感じているのかもしれない。今以上に気をつけないといけない——と気持ちを引き締めた。

妃実ちゃんの家の門を出てすぐ、わたしは足を止めた。  
門の隣の壁に寄りかかって、大和が立っていたからだ。

「——なんで？」

純粹な疑問だ。どうして妃実ちゃんの家の前に大和がいるんだろう。大和は自分の携帯を振って見せた。

「妃実香から。さっき、そろそろ里珠が帰るって連絡があった」

わたしはつい今出てきたばかりの家を振り向いた。当然妃実ちゃんの姿は見えなかったけど、彼女のおせっかいに苦笑いが込み上げてきた。



「迎えに来てもらうほどの距離じゃないのに——でもありがとう」  
「んー。帰るぞ」

大和はいつもと同じようにさり気なくわたしに手を差し出す。  
これまで何度も触れた、大和の手。いつもなら迷いなくその手をとるのに、今は触れるのが躊躇われた。

「ほら」

大和が有無を言わせずわたしの手を掴んで歩き始めた。わたしの躊躇いにも気付いていたはずなのに、そのことは何も言わなかった。少しの間、二人とも無言で歩いた。言いたいこと、言わないといけないことはたくさんあるはずなのに、どうしても言葉が出て来ない。視線を落として自分の足元を見つめる。そんな自分が情けなかった。大和の顔を見ることができなかった。

「エンターティナーはいい曲だな」

その言葉に、わたしはハッとして顔を上げた。大和はそんなわたしを見やって小さく笑う。

「——俺、葵と里珠の連弾、はつきり憶えてるよ」

視線を前に戻して大和は話し始めた。

「二人は小4で俺は5年。年末の発表会で里珠と葵が連弾をするこ  
とになった。その練習の時から俺も一緒にいたけど、二人は本当に  
楽しそうで、俺はそれをいつも羨ましく見えた。だから今でもはっ  
きり憶えてるんだ」

「……」

「葵のピアノの腕前は那時すでにかなりのもので、まだたどたどしかった里珠を上手くリードしていた。そのうち、葵につられるように里珠もめきめき上達していった。弾けないところが弾けるようになる度、里珠は嬉しそうに葵を見て笑ってさ。そのことがなんかすごく悔しかったよ」

わたしの知らないわたしのことを、大和が懐かしそうに語る。不思議な感じだった。

「里珠が葵のことが好きなことは、その時からわかっていた。だからな、里珠」

大和は一旦言葉を切り深呼吸するように息を吸うと、これまでと同じように静かな声で続けた。

「里珠が俺と付き合い始めて、記憶にある『連弾』の話をした時、すぐに葵のことを言ってるのだと気付いた。だから、里珠の初恋の相手が、自分ではなく本当は葵だってことも、当然すぐに気付いたよ」

「……ごめん」

ついそう言葉を挟めると、大和が嘆息混じりで笑った。

「謝んな。そういうつもりで話してる訳じゃないから。俺が言いたいののは、最初からわかっていたから、今さら里珠が罪悪感なんかを感じる必要はないってことだよ。だから、謝るな。俺は騙されていた訳じゃないし里珠が嘘をついていた訳でもない。記憶の混同は誰のせいでもないんだから。それよりも——良かったと喜べよ」

「喜ぶ？」

どういう意味だろうと大和を見上げると、大和は優しく笑ってわたしと目を合わせた。

「葵の記憶——大事な初恋の記憶、ちゃんと戻ってきて良かったじゃないか」

彼の思いやりが胸に迫って言葉が出なかった。どうして笑顔でこんなに優しいことが言えるのだろう。

初恋の記憶だけではなく、葵本人までもがわたしの前に戻ってきたというのに。すぐに手の届くところにいるというのに。

「……このまま思い出してもいいのかな」

大和はゆっくりと深く頷いた。

「思い出せ。逃げるなよ。それにこの前言っただろう？ 里珠が何を思い出しても俺の気持ちは揺るがないって」

繋いだ手の力が一層強くなった。

「だからもう全部思い出せ。俺はずっとおまえの支えになるから」

この時のわたしは、痛いくらい真剣みを帯びた大和の眼差しを、ただ黙って受け止めることしかできなかった。

『おまえの支えになるから』

大和がわたしにそう言ってくれたのは、これが初めてではなかった。

去年の春のこと。ピアノの先生でもあった大和のお母さん——美和先生が海外に転居するということで、わたしはお別れの挨拶に柚木家を訪れていた。

比較的穏やかな性格の大和とは違い、母親の美和先生はとても感情の起伏が激しい人で、子どものように無邪気で底抜けに楽しい時もあれば、荒々しいと思えるほどにわたしたちを厳しく叱咤することもあった。先生はわたしたち教え子を、ピアノを習いに来ている「子ども」ではなく、自分と対等の一人の人として接してくれていたように思う。幼い時から受けているレッスンも、子どもだからといって甘やかされたことはない。わたしの中で美和先生は「友達のお母さん」ではなく、やっぱり「先生」でしかありえなかった。

そんな美和先生が、この日の別れ際にわたしの頭を抱きしめるようにしながら優しく撫でてくれた。そんな「子ども」にするようなことを美和先生がしてくれたのはこれまでに初めてのことで、わたしは心底驚いた。そんなわたしに、美和先生は静かに語りかけてきた。

『ねえ、里珠。あなたは自分で気付いているかしら？ 里珠の奏でる音は穏やかで優しく、とても可憐。だけど、ただそれだけ。で

も、この世界に溢れている音は、決して穏やかで優しいものだけじゃない。もっとドロドロとして、汚くて、激しくて……哀しくて、辛くて、苦しい——そんな音もあるの。里珠。あなたにもいつかそんな音がちゃんと出せるようになればいいわね。そうしたら、もっとあなたの世界が豊かになるわ』

美和先生は緩やかに言葉を紡ぐ。

『辛いこと悲しいことから目も目を逸らさず、耳を塞がず、逃げずにちゃんと正面から向き合うことができたなら、いつかあなたにもちゃんと奏でることができるようだよ』

そして、わたしに微笑みかけてくれた。優しいのに、どこか悲しげな微笑み——なぜだか胸が痛かった。

話が終わり、大和の家の門を出ようとした時、わたしは大和に引きとめられた。

『もう一度、一緒に母さんのところに来て欲しい』

訝しむわたしに、大和は真剣な表情で言った。

『やっぱり、向こうに行かれる前にちゃんと母さんには伝えておきたくて——俺には、大事な人がいるということ』

大事な人？ と首を傾げる間もなく大和は続けた。

『俺は里珠のことが好きだよ。誰よりも大切に思ってる』

あまりにサラリと言われて、わたしはただポカンとして大和を見返すことしかできなかった。大和はそんなわたしを見て苦笑した。

『さっきの話聞いてた。「逃げずにちゃんと正面から向き合う――」里珠がそうできるように、俺は隣で支えていきたい。俺がおまへの支えになると決めた。だから』

そう言った大和は、何かを決意した力強い目をしていた。

その時にはわけがわからなかった二人の言葉。

美和先生と大和の言った言葉の本当の意味が、わたしの中で今ようやく繋がった。

『目を逸らさず、耳を塞がず、逃げずにちゃんと正面から向き合う』

あれは、わたしが奥底に封じ込めてしまった記憶――葵に関わる記憶のことを指していたのだ。

＊

＊

＊

葵のことを思い出してから三日が経った。

ひとつのことを思い出せば、そこからポロポロと零れるように、葵の記憶が戻ってきた。

それは夢となって断片的に甦ってくることもあれば、日常のふとした瞬間に、なだれ込むかのように記憶の映像が浮かんでくることもあった。

まだ幼い顔をした葵の顔。女の子と間違われてもおかしくなく、  
らいかわいい顔。本人がそれをとてきにしていたこと。

学校の帰り道、次の電柱にどちらが早く着くかと競争をした。そ  
ういう時はたいていわたしが勝て、葵は二人分のランドセルを前  
後に抱えて歩くことになったこと。

夏の暑い日。アイスクリームを食べながら一緒に歩いた。食べて  
いたアイスが二人同時に溶けてボタツと道に落ち、二人で顔を合わ  
せて笑ったこと。

授業中に発表をする葵の姿。よく通る声。葵は勉強も良く出来た  
こと。

それから、それから――。

……思い出した記憶はそれはそれは鮮やかで、どうしてこれまで  
忘れていられたのか不思議なぐらいた。

葵のことを思い出せば、胸が切ないほどきゅんと締め付けられた。  
幼いわたしは彼に恋心を抱いていたこと、確かにそれを確信した。

なのに、わたしはその記憶を全て丸ごと封印してしまっていたの  
だ。

葵と共に遭ったという事故のせいだ。

その事故については、いまだ思い出すことができない。考えよう  
とすると、前のような頭痛が激しく襲ってきた。

この事故こそすべての根源で、思い出す必要があるはず――そんな  
思いとは裏腹に、わたしの体はその記憶を掘り起こすことに、頑  
ななまでの拒絶反応を起こしていた。

\*

\*

\*

『里珠も葵のことを思い出してきたみたいだし、昔のように四人で遊ぼうよ』

そう言って、みんなで遊びに行こうと切り出したのは妃実ちゃんだった。わたしには反対する理由などあるはずもなく、大和も葵も承諾したためにその話ほとんどん拍子に進んで、週末は四人でそろって遊園地へ行くことになった。

大和の家の前で集合し、そろって電車で出掛ける。なんとなく遠足気分だ。

この日ばかりはわたしもいろいろ考えるのを止めて、四人の時間を純粹に楽しもう——そう思った。

そこは小規模な遊園地ではあったけど、休日ともなればそれなりに混雑もしている。家族連れが多いかと思いきや、案外学生同士で来ている人たちも多かった。かくいうわたしたちだってその中の一組だ。

「うっわー、久しぶりだな、遊園地。なんかわくわくするね」

はしゃいだ声をあげる妃実ちゃんに、大和が苦笑した。

「妃実香、ホントは自分がただ来たかっただけだろ」

「うわ。人の気遣いをそういうふうにする？」

「気遣いとか自分で言うなって」

「言わせてるのはアンタでしょ」

いつものように軽口をたたき合う二人を笑いながら、わたしはぼんやりこの前の妃実ちゃんの言葉を思い出していた。



『隙あらば頂くからね』

あれは本気なのかな……妃実ちゃんはやっぱりまだ大和のことが好きなんだろうか。今の二人の様子を見ても、そういう雰囲気があるようには見えない。わたしがそれを感じられないだけかな？　こんなだから「鈍い」と言われても仕方がないかもしれない。これまでも、わたしはずいぶん無神経だったりしたんじゃないだろうか……。

「里珠？」

不意に声を掛けられて反射的振り向き、ドキッとしてしまう。葵が不思議そうな顔をしてわたしの顔を窺っていた。

「なんか元氣ない？」

「や、違う違う！　ちょっとした考え事してただけ」

「考え事って？」

「いやもう、本当に大したことではないから」

本当に葵に心配してもらうほどのことではない。ハハハと軽く笑ってかわしていると、大和がわたしの隣に寄って来た。

「どうした？」

「里珠がなんか元氣ない」

ご丁寧に答える葵に、わたしは慌てて言葉を被せた。

「そ、そんなことないし！　本当に何でもないからね」  
「そうか？」

心配そうに顔を曇らせる大和に「大丈夫だから」と笑いつつ、わたしは心の内で反省する。

どんな理由だろうと、みんなのいる前で不安そうな顔なんてするべきじゃなかったのだ。今のわたしは、ちょっとしたことでもみんなに余計な心配をかけてしまうんだ……そう考えてまたズンと落ち込みそうになり、わたしは慌ててそれを振り払った。

そうだ。今日は考えるのは止めて、純粹に楽しもうと決めてたはずだ。せっかくみんなで遊びに来たわけだし。

「さーて！」

わたしが顔を上げたのを見計らったかのように、妃実ちゃんがパッと大きく手を打った。

「早速だけど、まずはあれ行きますか！」

「あ！　さんせーい！」

妃実ちゃんが指差したのは高い位置でぐるりと一回転しているジェットコースターのレール。わたしが陰気臭さを跳ねのけるように高く手を上げた。

——そうだ、楽しまなきゃ。

わたしは妃実ちゃんと顔を見合わせて笑って、露骨に気の乗らない素振りを見せる二人を促すように、大股で歩き始めた。

ジェットコースターを皮切りに、わたしたちはいろんなアトラクションを制覇して行った。

絶叫マシン系からメリーゴーランドのような和み系のもの。けっこう難関と噂のミラーハウスに、果ては子供だましのようなお化け

屋敷までも。

……楽しかった。

こんな楽しく人と「遊んだ」のは本当に久し振りのような気がした。

大和が笑う。妃実ちゃんが笑う。葵が笑う。

——ああ、そうだった、と心のどこかで懐かしく感じた。

わたしたち四人は、確かに以前こうやってみんなで遊んでいたんだ。みんなで笑い合って、ふざけ合って……わたしたちは本当に仲良しだった。記憶として思い出せるのはまだ少ないけれど、その事実を感じられただけでも幸せだと思う。

思い切り遊び倒して、気が付けば日もずいぶんと落ちてきていた。秋の日暮れは本当に早い。

最後に観覧車に乗って帰ろうと、のんびりとそこを目指して歩いていた。

「まさか大和も葵も絶叫系が駄目だったとはね。笑える、ねー、里珠」

「ねー！」

わたしも妃実ちゃんに同意して笑った。もちろん、本気で笑いものにしているわけじゃないけれど。

「誰にでも苦手なものはあるんです」

大和が拗ねたようにため息をつく。葵はただ苦笑を浮かべていた。その葵の髪にチラリと何かが付いているのが見えてわたしは足を止めた。

「あ、ちょっと待って、葵。髪——枯れ葉が付いてるよ、ここ」  
「え？」

葵も立ち止り頭に手をやる。だけど、その場所には触れず、その茶色い葉っぱは依然髪に絡まったままだ。

「もうちょっと右——ああ、違う」

もどかしい。とってやった方が早そうだとわたしは葵の髪に手を伸ばした——その途端。

「——っ！」

「！」

バチバチツというような音が弾けたかと思うと、指先に衝撃が走った。わたしの手は弾かれ、葵も跳び退るようにわたしから離れる。指先の痛みよりも驚きで心臓がバクバクとなった。

「あ……」

葵と再会した日のことが脳裏に浮かんた。あの日も、葵に触れた時こういうことがあった。葵もそれを思い出したのだろう、わたしたちは顔を見合わせて同じように息を飲んだ。

「ちょっと何、今の？」

見ていた妃実ちゃんがあんぐりと口を開ける。大和は不審そうに眉根を寄せた。

「……二人とも大丈夫か？」

大和はわたしと葵の間に入り、気遣うように交互に顔を見る。そしてついでのように、葵の髪についた枯れ葉をつまんだ。わたしの時のように静電気のようなものは起きなかった。

「あ……サンキュ」

葵が小さく笑う。だけど、その顔にも明らかな狼狽の色が浮かんでいた。葵も戸惑っている。

「な、なあに、アンタたち、二人ともひどい静電気体質なのね」

その場に流れた異様な雰囲気払い除けるように、明るい声で妃実ちゃんが言った。

「そ、そうみたい——ね、葵？」

わたしもあえて明るく笑って答える。気遣ってもらってるのがわかったから。葵も「みたいだな」とさっきまでの動揺をきれいに隠して柔らかく笑った。だけど、チラリとわたしに向けた視線はどこか辛そうに見えた。

何か嫌なモヤモヤが胸に広がる。寒いはずなのに、冷や汗がわきの下を伝うのがわかった。

あれは本当に静電気……？

「ほら！　ポーっとしてないで行こうぜ」

考え込みそうになるわたしの頭を、大和がポンポンと叩いてそのまま肩を抱いてくれた。思わず顔を見上げると、大和がいつものよ

うに優しく笑いかけてくる。大和にはわたしの不安が見えているのかもしれない。『大丈夫だ』と言われているようで、わたしは小さく頷いて微笑った。

……うん。今は何も考えずにいよう。

わたしたちは何事もなかったかのように、それまでと同じように話をしながら観覧車へと向かった。

「なんか……ごめん」

斜向かいに座った葵が申し訳なさそうに言葉を落とす。

「オレと二人とか嫌だろ？」

そう言って深いため息をついた葵に、わたしは小さく笑って首を振った。

「別に嫌じゃないよ」

正面に座らず斜向かいに座ったのは、さっきの静電気のような現象が気になっているからで、向き合うのが嫌な訳じゃない。

今、このゴンドラの中は、わたしと葵の二人しかない。大和と妃実ちゃんは一つ後のゴンドラに乗った。観覧車に乗る前、当たり前前の組み合わせじゃ面白くないからと、じゃんけんで二人組を決めたその結果だ。もちろん、というべきか、言い出したのは妃実ちゃんだ。

「まったく、何考えてんだかな」

苦笑しながら葵が窓の外に目を向けた。わたしも同じように外を眺める。

ゆっくりと高度を増していく景色を眺めながら、それからしばらくわたしたちは無言だった。それでも気まずい訳じゃない。ただ静かな穏やかな雰囲気、そんな感じだ。

……うん、そうだった。昔も葵はあまりお喋りなほうではなかった。だけど、わたしはそんな葵と一緒にいるのが好きで、何かと理由を付けては傍にいたような気がする。葵も笑って受け入れてくれていたから、わたしはそれが本当に嬉しくて……。

「――どうした？」

「ん？」

不意に声をかけられ葵を見ると、わたしを見て不思議そうに首を傾げている。

「にやけてる」

「え、そう？」

咄嗟に両手で頬を挟み込んだ。どうやら、知らぬ間に頬が緩んでしまってたようだ。

「なんか面白いものでも見つけた？」

外をさらによく見ようと目を細める葵にわたしは小さく笑った。

「そうじゃないよ。ちょっと思い出し笑い」

葵が微かに目を見開く。

「思い出し笑い？」

「うん――」

頷いたものの、その後をどう続けようか迷ってしまった。葵は黙



ってわたしを見て言葉を待っている。その視線に負けてわたしは話し始めた。

「……昔の葵のこと思い出してたの」

「昔のオレ？」

葵が小さく驚くのがわかった。あの日葵が弾くピアノを聞いて以来、葵とこうして面と向かって話すのは初めてだ。

「——ああ、そっか……思い出してきたんだったな」

葵が複雑そうな表情を見せた。たぶん、葵はこういう顔をすればいいかわからないのだ。わたしだって同じだ。恐らく、わたしも今複雑な顔で話してると思う。

「うん。まだほんの少しなのかもしれないけど、少しずつ」

「そっか」

葵は複雑そうな顔のまま、それでも微かに笑った。

「いいのに、急いで思い出さなくても。——体調は？」

「うん、大丈夫。自然に思い出す分にはそんなにひどいことにはならないみたい。ただ、無理矢理思い出そうとするとちょっと辛いかな」

「だったら思い出すなよ」

それは静かだけどこか強い口調で、わたしは思わず目を見開いた。葵がはっとしたように言葉をつなげる。

「そのうち自然に思い出すさ——それより、良かった」

とりなすように笑顔を浮かべる葵に、わたしはまた戸惑う。

「良かったって、何が？」

「里珠が思い出した記憶が、つい思い出し笑いしてしまうようなもので」

葵がいつそう笑みを深くした。

「オレのことがいい思い出として里珠の中に残っているなら何よりだ」

葵はそう言って窓の外に目を向けた。その仕草は、わたしに言葉を返されることを拒んでいるかのように思えた。

わたしはそれ以上この話を続けるのを諦めて、話題を変えることにした。

「ねえ。葵は今どこに住んで何をしてるの？」

昔の話がだめなら現在の話だ。葵は不意を衝かれたように目を丸くした。

「今？　——あー……」

葵は一瞬言い淀むように視線を泳がせたけど、すぐに答えてくれた。

「今は九州に住んでる。九州の大学——医大に通ってるよ」

「医大？　葵、医学生なの？　すごい！」

思わずそう声を上げると、葵が苦笑を洩らした。

「別にすごくはないだろ」

「すごいよ。医大って難しいじゃない」

少なくとも簡単に入れるところじゃないのは確かだ。

「頭いいんだ、葵」

こんな月並みな言葉を言うわたしが馬鹿みたいだけど。葵は苦笑を浮かべたままで、それどころかどこか自嘲するようなため息をついて目を伏せた。

「頭がいい訳じゃないさ。ただ、勉強は無駄にできたから」

「無駄について……すごい。葵はずっと医者になりたかったの？」

そう聞くと、葵は再び外に目を向けた。わたしもつられてその方を見る。見えるのは青い空。ゴンドラはいつの間にかずいぶん高くまで上がってきたようだ。もうすぐ頂点かもしれない。

「……別に医者になりたかったわけじゃない。オレはただ、現実を見たくなくて……」

横を向いたままで話す葵の声は小さくて、聞くのにかなりの注意を向けなければいけなかった。それでも一言も聞き逃したくなくて、わたしはじつと耳を傾けた。

「色も音も失ってしまったかのような現実から逃げたくて、勉強にのめりこんだ。勉強だけじゃなくて、スポーツもいろいろやった。水泳にサッカーに空手に陸上……とにかく、やってる間はそれ以外

のことを考えなくてすむのなら、何でも良かった。医大に入ったのもその延長。現実に向き合う時間が少ないほど楽だから」

投げやりにさえ聞こえる口調。どう言葉を返していいのかわからない。葵が言う「色も音も失ってしまったかのような現実」がどういうことなのか、とても気になる。だけど、とてもそれを聞き返せる雰囲気じゃなかった。

葵もいろいろ抱えていることがあるのだろう。

「――てっぺんきたな」

それまでと打って変わったような明るい声を葵があげた。ゴンドラが一番上に来たようだ。わたしもその声に合わせて気持ちを切り替えた。

「本当だ。うわあ、高いね」

窓にへばりつくように外を見て眼下を覗く。地上では見上げるほどのビルも、ここからは小さく見えた。しばらくその景色を眺めていると、

「里珠、そっち」

葵がわたしの背後の窓を指差した。後ろを向くと、次のゴンドラがちょうど同じ高さに見えた。むろん、それに乗っているのは大和と妃実ちゃんだ。

「手振ってるよね？」

光の反射で見難いけれど、向こうからこちらに向って手を振って

いる。たぶん、妃実ちゃんだろう。わたしも手を大きく振り返してから葵の方に向き直った。

「あっちは楽しそうだね」

「あっち『は』？」

葵が意地悪く上げ足をとる。わたしは苦笑して訂正した。

「あっち『も』か」

「よし」

葵が笑った。その顔にさっきまでの沈んだような表情は見えなくて、わたしは少しだけ安心した。

「それにしても、里珠は平気なのか？」

「え？」

いきなり何だろうと首を傾げると、葵は呆れたような息をついた。

「大和が他の女と二人っきりになって」

「！」

これには不意を突かれてしまった。

「そんなこと……考えなかった」

自分でも動揺するのがわかった。大和が妃実ちゃんと二人きりになる、ということよりも、自分が葵と一緒にゴンドラに乗る、と言うことの方が気がになっていたのだ、わたしは。

そのことに思い当り、愕然としてしまった。わたし、また自分の

ことしか考えてなかった。

「大和はどう思ってるんだろうな」

葵が意味ありげに薄く笑った。少しだけ意地の悪い笑い方だ。

「自分の彼女がほかの男とこんな場所に二人っきりっていう状況」  
「そ、それは」

急にドキドキとしてきた。そうだ、改めて考えてみれば、この状況は客観的に見てちょっと微妙なものかもしれない。

わたしは初恋のひとと二人っきりで、大和は彼のが好きな妃実ちゃんと二人っきりで。

……うん、微妙だ。

だけど、とわたしは顔を上げた。

「大丈夫だよ。何も心配することなんかはないと思う。わたしも大和も」

「へえ？」

葵が面白そうに目を細めた。

「何で？」

「何でって。わたしも大和も、妃実ちゃんのこと信頼してるし。もちろん、葵のことも」

どう考えても間違いなど起きないような気がした。不安に思うことなどないはずだ。だからそう言ったのだけど、葵は意地の悪い笑みを消さなかった。

「信頼ねえ……でも、そう簡単なものじゃないと思うぜ、人の気持ちって」

「え……？」

「妃実香は大和のことが好きなんだろ？」

その言葉に、わたしは少なからず驚いた。

「何でわかるの？」

「態度見てればわかるだろ、そんなの」

呆れたように息をつく。わたしはぐっと言葉に詰まってしまった。やっぱり、そうなんだ。気付かなかったのはわたしだけ……どれだけ鈍いのだろう、わたし。

「まあ、大和から間違いを起こすことは絶対にならないだろうけど。でも妃実香は昔から突拍子もないことしでかしたりするからな、わからないぜ？」

わたしの反応を試すように葵が目を向ける。その視線にわたしはだんだん気持ちがざわついてくる。つい後ろのゴンドラを振り向きたくなるのを懸命に抑えた。振り向いたところで、今はもう見えないかもしれないけど。

じりじりとして手をギュッと握りしめると、葵がうつすらと浮かべていた笑みを顰めた。

「……オレだってわからないぜ。今ここにいるオレは、里珠の信頼してるオレじゃないかもしれない」

「葵？」

「オレはおまえが思ってる「久遠葵」とは違うかもしれない。そんな男、信頼しても大丈夫なのか？」

そう言う葵の目はどこか悲しく見えた。そんな目でわたしをじっと見つめる。

「今ここで、里珠に手を出して無理矢理自分のものにする——そんな男だったらどうする？」

その言葉に思わず息をのんだ。これまでと違う様相を見せた葵。葵のその挑発的な言葉にどんな気持ちが隠れているのか、まるで読めなかった。

身じろぎすらできず、ただじっと葵を見返した。葵もわたしから視線を逸らさない。

どれぐらいそうしていただろう、ようやく一つ大きな息について、わたしは口を開いた。

「わたしは葵を信じてる」

葵が驚いたように目を見開く。

「どうしてそう言い切れる？ 里珠はつい数日前までオレのこと憶えてすらいなかったのに。おまえにとってオレはほとんど見知らぬ他人だろう？」

ズキン、と胸が痛んだ。確かにそう言われても仕方のないことなのかもしれないけど。だけど、今のわたしは目の前の彼をちゃんと「葵」として見ているのだ。

「……わたしにとって葵はあの頃のままだもの」

葵の目がいつそう大きく見開かれた。わたしは慎重に言葉を選び



ながら続ける。

「確かに、あれからずいぶん経つし、変わったところもたくさんあると思うけど……わたしの中では変わってなかったよ、葵は。すんなりとあの頃の葵と今の葵が重なった。こうして一緒にいるとあの頃と同じようにホッとできる。だから、信頼できるとそう思う。それに、この前葵も自分で言ったじゃない。『間違っても人の彼女に手を出すような真似はしない』って」

「あ、ああ……」

面喰ったようにそう呟いたきり、しばらくの間葵は何も言わずわたしの目を見返していたけれど、やがてフツと力が抜けたように口許を緩めて目を伏せた。

「……そっか。里珠の中では変わってないのか、オレは」

「うん」

「――ありがとう」

葵はそう言ってくしゃりと笑った。その笑顔はまさに昔と変わらない笑顔だ。だけど、すぐに葵はその笑みを引っ込めて、小さな声で話し出した。

「あのな、里珠。オレ、本当は……」

先を促すように首を傾げると、葵は言いにくそうに言葉を詰まらせて唇を噛み、わたしから目を逸らした。

「……いや、やっぱりいい」

「ええ？」

そういうふう言葉に切られるとすぐ気になる。食い下がるう  
とすると、葵が先手を打つように口を開いた。

「いいんだ、今は。もう少し、このままでいたいから。だけど、里  
珠。オレ達はもうあまり近付かない方がいいかもしれないな」  
「え……？」

近付かない方がいい？

その言葉に、ちらりと静電気のような現象のことが頭に浮かん  
だけれど、葵の静かな微笑みはわたしに何も聞くなと訴えていて、結  
局わたしはそのまま口を噤んだ。

葵は何を知ってるんだろう？ 何を言いたいんだろう？

どこか悶々とした気持ちを抱えたまま、わたしは窓の外に目を向  
けた。

もう地上は近付いている。この二人の時間も終了が近付いていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8875w/>

---

それでも君はここにいる

2011年11月27日19時52分発行